

履修の手引き

2019 年度



未来を拓く医療人をめざして

北海道千歳リハビリテーション大学

Hokkaido Chitose College of Rehabilitation

目次

はじめに

1. 北海道千歳リハビリテーション大学の教育目標	1
2. 学位授与に関する方針（ディプロマ・ポリシー）	1
3. 教育課程の編成及び実施の方針（カリキュラム・ポリシー）	2
4. 入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）	2

I. 授業について

1. 学年および学期	3
2. 授業時間と時間割	3
3. クラス編成	3
4. 単位制	3
5. 単位の授与	4
6. 授業科目	4
7. 休講、補講、集中講義	4
8. 出席確認	4
9. 授業評価アンケート	4
10. 授業の録音、撮影の禁止	4

II. 履修について

1. 進級要件	5
2. 卒業要件	6
3. 臨床実習	8
4. 科目一覧	9
5. 教育マップ	13
6. 履修登録	14
7. 在学年限	14
8. 休学期間	14
9. 卒業認定方法	14
10. 学位の授与	14
11. 取得資格	14

III. 試験について

1. 試験の種類	15
2. 受験資格	15
3. 受験上の注意	16
4. 不正行為	16

IV. 成績評価について

1. 成績評価の方法	17
2. 評価区分および GPA 制度	17
3. GPA の対象外	17
4. GPA の算出方法	18
5. GPA の算出例	18
6. 成績の通知	18

V. 科目の概要について

1. 教養科目（理学療法学専攻、作業療法学専攻共通）	19
2. 専門基礎科目（理学療法学専攻、作業療法学専攻共通）	23
3. 専門科目（理学療法学専攻）	27
4. 専門科目（作業療法学専攻）	33

はじめに

本学では、教育目標のもと、学位授与に関する方針（ディプロマ・ポリシー）、教育課程の編成及び実施の方針（カリキュラム・ポリシー）並びに入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）を下記のとおり定めています。

皆さんは、人間力を高めつつ障害予防・健康増進などの新しいリハビリテーション医療のあり方に対応できる能力を4年間の課程で身につけるために、どのような方針および体系のもとでカリキュラムが編成されているかをしっかりと把握してください。本書は、入学から卒業までの学習を計画的に進めるために必要な情報を掲載しています。

1. 北海道千歳リハビリテーション大学の教育目標

- (1) 科学的な観察力、思考力ならびに表現力を身につける。
- (2) 他者の痛みの分かる心を持ち、他者の立場になって行動する態度を身につける。
- (3) 地域の課題に積極的に関わり、その課題解決に貢献する姿勢を養う。
- (4) 自ら問題を解決する能力と生涯にわたって学習を継続する姿勢とを養う。

2. 学位授与に関する方針（ディプロマ・ポリシー）

北海道千歳リハビリテーション大学の建学の精神は、「医療専門職教育を通じて真の人間を育成する」ことにあります。

この建学の精神に則り、「生命の尊厳」を基調とする医療専門職（理学療法士、作業療法士）としての使命感を自覚し、社会に奉仕し得る人間の育成、並びに専門的研究の成果を人類の福祉に活かしていくことのできる人材の養成を通じて、我が国の保健医療の発展と国民の健康増進に貢献することを目指しています。

この目標達成に向け、4年間の学部教育課程において、所定の期間在学して卒業に必要な単位を修得し、学位授与基準を満たしたことを定める審査に合格することによって学士（理学療法学または作業療法学）の学位を授与します。

その学位授与基準を満たすための学習到達目標は以下のとおりです。

- (1) 人間の尊厳と多様な価値観を理解し、他者との信頼関係を築き、高い倫理観をもって責任ある行動をとることができる。
- (2) 理学療法士および作業療法士として必要な専門的知識と技術を修得し、人の身体および精神機能における諸問題に対して、広い視野から捉えるとともに、根拠に基づく論理的思考をもって解決することができる。
- (3) 医学・医療の進歩ならびに社会のニーズの変化に対応するために、自己の専門性を発揮して地域社会に貢献する意欲と能力をもち、生涯にわたり自己研鑽することができる。
- (4) 地域社会のもつ文化、個々人の生活習慣の特性、地域社会と生活に根ざしたりリハビリテーションの使命と役割について理解し、対応することができる。

3. 教育課程の編成及び実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

北海道千歳リハビリテーション大学は、本学の「建学の精神」、および「学位授与に関する方針（ディプロマ・ポリシー）」に基づき、その学習到達目標を達成するために、以下のようなカリキュラムの方針に則り編成します。

- (1) 人間、生命と健康、社会と環境、文化とコミュニケーションに対する理解を深めるため、教養科目群を設けます。
- (2) 初年度に大学での学び方を中心とした導入基礎科目を設けます。
- (3) 医学の基盤として人体の構造、機能、病態を理解する専門基礎科目と、本学の目指す予防リハビリテーションの学問的基盤を習得するため、「健康増進・障害予防」関連科目を設けます。
- (4) 理学療法、作業療法の臨床および研究活動に必要な知識、技術、問題解決能力を修得するための専門科目を設けます。
- (5) 高度で専門的な内容へ段階的に進めるよう、教養科目・専門基礎科目・専門科目の履修順序を体系的に編成します。
- (6) 学生の主体的な学習を促すために、講義、実技、演習、ゼミナール等を組み合わせることにより、各科目に適した授業を編成します。

【理学療法学専攻】

教育課程の概要

人々が共により豊かで健康的な生活を営むことのできるように、身体の運動機能を最良の状態に保持し、さらに改善するために必要な科学的知識と技術を修得し、広い視野を持ち多様なアプローチを用いた支援ができる理学療法士の養成を目指します。

【作業療法学専攻】

教育課程の概要

身体または精神に障害のある人に対し、およびそれらの障害をきたす可能性のある人に対し、全人間性の回復というリハビリテーションの理念のもとに、人間の身体および精神機能、日常生活の諸活動ならびに作業活動能力などを改善するために必要な知識と技術を修得し、広い視野を持ち多様なアプローチを用いた支援ができる作業療法士の養成を目指します。

4. 入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

- (1) 学問に対する探究や課題解決に向けて主体的に取り組もうとする人
- (2) 人を思いやる心と倫理性を持つために他者の心身に気配りする人
- (3) 常にチャレンジ精神を持ち、積極的に他者との協調や連携を持とうとする人
- (4) 使命感を持ち、根気強く、最後まで責任を持ち続けようとする人

I. 授業について

1. 学年および学期

- (1) 学年は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終わります。
- (2) 学期は次の2学期です。

前期 4月1日から9月30日

後期 10月1日から3月31日

※ 授業回数確保等のため、変則的に後期の開始が9月中になることがあります。

2. 授業時間と時間割

- (1) 授業時間は、次のとおりです。授業科目によっては別に指定することがあります。

1 講目	9:00~10:30
2 講目	10:40~12:10
<昼休み>	12:10~13:00
3 講目	13:00~14:30
4 講目	14:40~16:10
5 講目	16:20~17:50
6 講目	18:00~19:30

- (2) 1講90分のうち、60分以上を受講しなければ欠席となります。
- (3) 時間割は、学年別、クラス別に編成されています。
※ 授業科目によっては、授業時間が変更される場合があります。この場合は、掲示板でお知らせします。
※ 必要に応じて、土曜日に授業を行うこともあります。

3. クラス編成

- (1) 理学療法学専攻は、A組、B組の2クラス(1クラス40名を基本とします)。
- (2) 作業療法学専攻は、1クラス(30名を基本とします)。

4. 単位制

1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して次の基準により単位数を定めています。

講義	15時間をもって1単位とする。 (教育上必要があるときは、30時間の講義をもって1単位とすることができる)
演習	30時間をもって1単位とする。 (教育上必要があるときは、15時間の講義をもって1単位とすることができる)
実習	45時間をもって1単位とする。 (教育上必要があるときは、30時間の講義をもって1単位とすることができる)

5. 単位の授与

授業科目を履修し、その科目の試験に合格した者には、所定の単位を授与します。

6. 授業科目

(1) 授業科目は、教養科目、専門基礎科目および専門科目で構成されています。

教養科目	リハビリテーションの知識と技術とが、現代社会で果たす意味を自覚できるように、必要な基本的知識を学びます。
専門基礎科目	高度な専門知識や技術を学ぶための前提となる両専攻共通の科目を学びます。
専門科目	各専攻に関する高度な理論・演習・臨床実習を系統的に学習し、実践的な手法を学びます。

(2) 各科目は、必修科目、選択必修科目および選択科目から構成されています。

必修科目	卒業まで必ず単位を修得しなければならない科目
選択必修科目	卒業までに決められた科目から決められた単位数を修得しなければならない科目
選択科目	定められた条件内で選択できる科目

7. 休講、補講、集中講義

- (1) 担当教員の都合により授業ができなくなった場合は、休講となります。
- (2) 補講は、休講となった授業に行います。
- (3) 集中講義は、授業科目によりある一定期間に集中して講義を行います。
※ 上記(1)～(3)のほか、教室変更等のお知らせは、掲示板で行います。

8. 出席確認

すべての授業で毎回出席確認を行います。各授業科目の時間数の3分の2以上を出席しなければ、試験を受けることはできませんので、ご注意ください。(Ⅲ. 試験について2. 受験資格を参照してください。)

9. 授業評価アンケート

本学では、教員の教育活動の向上について検討を行うことを目的に、臨床実習およびセミナーを除く科目の最終講義日に授業評価アンケートを無記名で実施しています。

これは、授業の質を高めるために行うもので、皆さんの素直な評価をお願いします。

10. 授業の録音、撮影の禁止

本学では、個人情報の保護、プライバシーへの配慮および著作権保護の観点から、授業のすべてについて、録音、撮影は禁止します。ただし、「合理的配慮」等の個別事情については、担当教員に相談してください。

Ⅱ. 履修について

1. 進級要件

学生が進級するためには、次の条件を満たさなければなりません。

- (1) その学年の必修科目、選択必修科目を全て修得すること。
- (2) 理学療法学専攻および作業療法学専攻ごとに規定する単位数を修得していること。

【理学療法学専攻】

要件	1 年生	2年次へ進級するために1年次修了時までに修得しなければならない単位数	2 年生	3年次へ進級するために2年次修了時までに修得しなければならない単位数	3 年生	4年次へ進級するために3年次修了時までに修得しなければならない単位数
	単	教養科目 14 単位	教養科目 17 単位	教養科目 22 単位	位	
		専門基礎科目 16 単位	専門基礎科目 37 単位	専門基礎科目 38 単位	数	
		専門科目 3 単位	専門科目 11 単位	専門科目 41 単位		

【作業療法学専攻】

要件	1 年生	2年次へ進級するために1年次修了時までに修得しなければならない単位数	2 年生	3年次へ進級するために2年次修了時までに修得しなければならない単位数	3 年生	4年次へ進級するために3年次修了時までに修得しなければならない単位数
	単	教養科目 14 単位	教養科目 17 単位	教養科目 22 単位	位	
		専門基礎科目 16 単位	専門基礎科目 36 単位	専門基礎科目 37 単位	数	
		専門科目 3 単位	専門科目 16 単位	専門科目 41 単位		

2. 卒業要件

学生が卒業するためには、理学療法学専攻および作業療法学専攻ごとに規定する所定の科目を履修し、必要な単位数を修得しなければなりません。

【理学療法学専攻】

- (1) 理学療法学専攻における卒業に必要な単位取得数は、129 単位です。
- (2) 最も履修単位が多い 1 年次の履修可能単位数は、43 単位（必修科目 30 単位、選択科目 13 単位）であることから、この 43 単位をもって 1 年間の履修科目の登録上限とします。

科 目	必修科目	選択科目	合 計
教養科目	17 単位	5 単位	22 単位
専門基礎科目	37 単位	3 単位	40 単位
専門科目	0 単位	67 単位	67 単位
合 計	54 単位	75 単位	129 単位

※ 専門科目の選択科目は、選択必修科目から 57 単位および選択科目から 10 単位以上を修得しなければなりません。なお、選択科目の履修は下記により選択してください。

理学療法 臨床実習	臨床見学セミナー（理学療法）	1 年前期	1 単位	8 科目 より 4 単位以 上選択
	臨床評価学セミナー（理学療法）	3 年前期	1 単位	
	臨床治療学セミナーⅠ（理学療法）	4 年前期	1 単位	
	臨床治療学セミナーⅡ（理学療法）	4 年前期	1 単位	
応用理学 療法	理学療法管理学	4 年後期	1 単位	7 科目 より 6 単位以 上選択
	理学療法ゼミⅠ	3 年通年	2 単位	
	理学療法ゼミⅡ	4 年後期	4 単位	
応用リハビ リテーショ ン	国際医療支援論	4 年後期	1 単位	
応用理学 療法	スポーツ傷害理学療法学	3 年前期	1 単位	7 科目 より 6 単位以 上選択
	高齢者理学療法学	3 年前期	1 単位	
	神経筋疾患理学療法学	3 年前期	1 単位	
	神経障害理学療法学特論	4 年後期	2 単位	
	運動器障害理学療法学特論	4 年後期	2 単位	
応用リハビ リテーショ ン	内部障害理学療法学特論	4 年後期	2 単位	
	生活行為向上リハビリテーション論	3 年前期	2 単位	

【作業療法学専攻】

- (1) 作業療法学専攻における卒業に必要な単位取得数は、129 単位です。
 (2) 最も履修単位が多い 1 年次の履修可能単位数は、44 単位（必修科目 30 単位、選択科目 14 単位）であることから、この 44 単位をもって 1 年間の履修科目の登録上限とします。

科 目	必修科目	選択科目	合 計
教養科目	17 単位	5 単位	22 単位
専門基礎科目	37 単位	2 単位	39 単位
専門科目	0 単位	68 単位	68 単位
合 計	54 単位	75 単位	129 単位

※ 専門科目の選択科目は、選択必修科目から 60 単位および選択科目から 8 単位以上を修得しなければなりません。なお、選択科目の履修は下記により選択してください。

作業療法 臨床実習	臨床見学セミナー（作業療法）	1 年前期	1 単位	6 科目 より 4 単位以 上選択
	臨床評価学セミナー（作業療法）	3 年前期	1 単位	
	臨床治療学セミナーⅠ（作業療法）	4 年前期	1 単位	
	臨床治療学セミナーⅡ（作業療法）	4 年前期	1 単位	
応用作業 療法	作業療法管理学	4 年後期	1 単位	
応用リハビ リテーショ ン	国際医療支援論	4 年後期	1 単位	
応用作業 療法	作業療法特別セミナー	4 年後期	3 単位	6 科目 より 4 単位以 上選択
	特別支援教育概論	4 年後期	1 単位	
	箱づくり法	4 年後期	1 単位	
	身体・老年期障害作業治療学特論	4 年後期	1 単位	
	精神障害作業治療学特論	4 年後期	1 単位	
	発達障害作業治療学特論	4 年後期	1 単位	

3. 臨床実習

理学療法学専攻および作業療法学専攻の臨床実習は、基礎的な理学療法・作業療法が実施できるレベルを目指し、人を思いやる心や責任感を養うことを目標としています。同時に、観察力や思考力及び表現力を高めることで対象となる方々の有する問題を解決する能力を身につけることを目指します。

【理学療法学専攻】

科目名	単位数	時期	期間
①臨床見学実習(理学療法)	1単位	1年前期(9月予定)	1週間
②臨床評価学実習(理学療法)	4単位	3年前期(8～9月予定)	4週間
③臨床治療学実習Ⅰ(理学療法)	8単位	4年前期(4～6月予定)	8週間
④臨床治療学実習Ⅱ(理学療法)	8単位	4年前期(7～8月予定)	8週間

※②臨床評価学実習(理学療法)の履修条件

専門科目の科目区分「理学療法評価学」のすべての授業科目および臨床見学実習(理学療法)を修得していなければなりません。

※③臨床治療学実習Ⅰ(理学療法)および④臨床治療学実習Ⅱ(理学療法)の履修条件

専門科目の科目区分「理学療法治療学」のすべての授業科目および臨床評価学実習(理学療法)を修得していなければなりません。

【作業療法学専攻】

科目名	単位数	時期	期間
①臨床見学実習(作業療法)	1単位	1年前期(9月予定)	1週間
②臨床評価学実習(作業療法)	4単位	3年前期(8～9月予定)	4週間
③臨床治療学実習Ⅰ(作業療法)	8単位	4年前期(4～6月予定)	8週間
④臨床治療学実習Ⅱ(作業療法)	8単位	4年前期(7～8月予定)	8週間

※②臨床評価学実習(作業療法)の履修条件

専門科目の科目区分「作業療法評価学」のすべての授業科目、作業分析学、日常生活活動学(作業療法)および臨床見学実習(作業療法)を修得していなければなりません。

※③臨床治療学実習Ⅰ(作業療法)および④臨床治療学実習Ⅱ(作業療法)の履修条件

専門科目の科目区分「作業療法治療学」のすべての授業科目および臨床評価学実習(作業療法)を修得していなければなりません。

4. 科目一覧

理学療法学専攻の必修および選択必修科目一覧														
科目区分	授業科目の名称	必要単位数	配当年次											
			1年次		2年次		3年次		4年次					
			前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教養科目 (計33単位)	導 科 目 基 礎	学びの技法	必(1)											
		理解と表現	必(2)											
		社会貢献の方法と実践	必(1)											
		情報学	選(1)											
	人 間 の 理 解	心理学	必(2)											
		倫理学	選(1)											
		応用倫理学		必(1)										
		思想の歴史		選(1)										
	社 会 の 認 識	歴史学		選(1)										
		社会調査法	選(1)											
		現代の社会と人間			必(1)									
		北海道の医療と社会・経済			必(1)									
	自 然 の 探 求	文化人類学			選(1)									
		生命科学概論	必(1)											
		自然科学概論	必(1)											
		統計学	選(1)											
		生物学	選(1)											
		基礎生化学			必(2)									
	英 語 科 目	物理学			選(1)									
		スポーツ・レクリエーション学				選(1)								
		基礎英語	必(2)											
		英会話		選(2)										
		英語ライティング				選(2)								
専 門 基 礎 科 目 (計42単位)	基 礎 医 学	保健医学英語 I				必(2)								
		保健医学英語 II						選(2)						
		人体構造機能学 I (筋・骨関節系)	必(2)											
		人体構造機能学 I (神経系)	必(2)											
		人体構造機能学 I (内臓・脈管系)		必(2)										
		人体構造機能学 II (筋・骨関節系)		必(1)										
		人体構造機能学 II (神経系)		必(1)										
		人体構造機能学 II (内臓・脈管系)			必(1)									
		人体構造機能学実習				必(3)								
		運動学		必(2)										
	臨 床 医 学	運動学演習		必(2)										
		老年学			必(1)									
		人間発達学		必(1)										
		精神障害基礎論			必(1)									
		薬理学概論				選(1)								
		医学概論			必(1)									
		リハビリテーション概論	必(1)											
		周術期医療基礎論			必(1)									
		内部障害基礎論			必(2)									
		運動器障害基礎論			必(2)									
	保 健 医 療 福 祉 と シ ョ ン の 理 念	中枢神経障害基礎論			必(2)									
		発達障害基礎論			必(1)									
		医用画像解析学概論				選(1)								
臨床心理学				必(2)										
医療安全管理学							必(1)							
公衆衛生学												必(1)		
福祉介護概論					選(1)									
在宅リハビリテーション学					選(1)									
リ ハ ビ リ テ ー シ ョ ン の 理 念	言語聴覚療法概論				選(1)									
	健康増進障害予防概論			必(2)										
	健康増進障害予防演習 I (検査測定)					必(1)								
	健康増進障害予防演習 II (実践指導)												必(1)	

科目区分	授業科目の名称	必要単位数	配当年次										
			1年次		2年次		3年次		4年次				
			前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期			
専門科目（計80単位）	基礎理学	理学療法概論	選必(1)										
		日常生活活動学(理学療法)			選必(2)								
		物理療法学						選必(2)					
		義肢装具学(理学療法)						選必(2)					
	理学療法評価学	理学療法基礎評価学Ⅰ			選必(1)								
		理学療法基礎評価学Ⅰ演習			選必(1)								
		理学療法基礎評価学Ⅱ				選必(2)							
		日常生活活動評価学				選必(1)							
		日常生活活動評価学演習				選必(1)							
	理学療法治療学	神経障害理学療法学						選必(2)					
		神経障害理学療法学演習						選必(1)					
		神経障害理学療法学実習							選必(1)				
		運動器障害理学療法学						選必(2)					
		運動器障害理学療法学演習Ⅰ						選必(1)					
		運動器障害理学療法学演習Ⅱ							選必(1)				
		内部障害理学療法学						選必(2)					
		内部障害理学療法学演習Ⅰ						選必(1)					
	療理地域学	内部障害理学療法学演習Ⅱ							選必(1)				
		地域理学療法学							選必(2)				
	理学療法臨床実習	生活環境学(理学療法)							選必(2)				
		臨床見学セミナー(理学療法)	選(1)										
		臨床見学実習(理学療法)	選必(1)										
		臨床評価学セミナー(理学療法)						選(1)					
		臨床評価学実習(理学療法)						選必(4)					
		臨床治療学セミナーⅠ(理学療法)								選(1)			
		臨床治療学実習Ⅰ(理学療法)									選必(8)		
		臨床治療学セミナーⅡ(理学療法)									選(1)		
	臨床治療学実習Ⅱ(理学療法)										選必(8)		
	応用理学療法	ケーススタディー							選必(2)				
		理学療法研究法							選必(1)				
		理学療法研究法演習(卒業研究)									選必(4)		
		理学療法管理学										選(1)	
		理学療法ゼミⅠ							選(2)				
		理学療法ゼミⅡ										選(4)	
		スポーツ傷害理学療法学						選(1)					
		高齢者理学療法学						選(1)					
		神経筋疾患理学療法学						選(1)					
		神経障害理学療法学特論										選(2)	
		運動器障害理学療法学特論										選(2)	
	内部障害理学療法学特論										選(2)		
シブション	生活行為向上リハビリテーション論						選(2)						
	国際医療支援論										選(1)		
合計単位数		155	23	20	18	20	23	15	36				
卒業要件単位数		129	17	15	17	12	13	15	22				

作業療法学専攻の必修および選択必修科目一覧

科目区分	授業科目の名称	必要単位数	配当年次																						
			1年次		2年次		3年次		4年次																
			前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期															
教養科目(計33単位)	導 科 目 基 礎	学びの技法	必(1)																						
		理解と表現	必(2)																						
		社会貢献の方法と実践	必(1)																						
		情報学	選(1)																						
	人 間 の 理 解	心理学	必(2)																						
		倫理学	選(1)																						
		応用倫理学		必(1)																					
		思想の歴史		選(1)																					
	社 会 の 認 識	歴史学			選(1)																				
		社会調査法	選(1)																						
		現代の社会と人間				必(1)																			
		北海道の医療と社会・経済				必(1)																			
	自 然 の 探 求	文化人類学				選(1)																			
		生命科学概論	必(1)																						
		自然科学概論	必(1)																						
		統計学	選(1)																						
		生物学	選(1)																						
		基礎生化学				必(2)																			
	英 語 科 目	物理学			選(1)																				
		スポーツ・レクリエーション学						選(1)																	
		基礎英語	必(2)																						
		英会話				選(2)																			
	専 門 基 礎 科 目 (計42単位)	基 礎 医 学	英語ライティング					選(2)																	
			保健医学英語 I						選(2)																
保健医学英語 II											選(2)														
人体構造機能学 I (筋・骨関節系)			必(2)																						
人体構造機能学 I (神経系)			必(2)																						
人体構造機能学 I (内臓・脈管系)						必(2)																			
人体構造機能学 II (筋・骨関節系)						必(1)																			
人体構造機能学 II (神経系)						必(1)																			
人体構造機能学 II (内臓・脈管系)								必(1)																	
人体構造機能学実習									必(1)																
運動学								必(2)																	
運動学演習								必(2)																	
老年学									必(1)																
人間発達学									必(1)																
臨 床 医 学		精神障害基礎論							必(1)																
		薬理学概論									選(1)														
		医学概論									必(1)														
		リハビリテーション概論	必(1)																						
		周術期医療基礎論								必(1)															
		内部障害基礎論								必(2)															
		運動器障害基礎論								必(2)															
		中枢神経障害基礎論								必(2)															
		発達障害基礎論								必(1)															
		医用画像解析学概論										選(1)													
	臨床心理学								必(2)																
	医療安全管理学														必(1)										
保 健 医 療 福 祉 と シ ョ ン の 理 念	公衆衛生学																						必(1)		
	福祉介護概論											選(1)													
	在宅リハビリテーション学											選(1)													
	言語聴覚療法概論											選(1)													
	健康増進障害予防概論								必(2)																
	健康増進障害予防演習 I (検査測定)											必(1)													
	健康増進障害予防演習 II (実践指導)																						必(1)		

科目区分	授業科目の名称	必要単位数	配当年次																
			1年次		2年次		3年次		4年次										
			前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期									
専 門 科 目 (計74単位)	基礎 作 業 療 法	作業療法概論	選必(1)																
		作業学概論				選必(2)													
		作業分析学				選必(2)													
		日常生活活動学(作業療法)				選必(2)													
		日常生活活動学(作業療法)演習						選必(1)											
		義肢装具学(作業療法)								選必(1)									
		義肢装具学(作業療法)演習								選必(1)									
		社会生活行為学								選必(1)									
	作 業 療 法 評 価 学	作業療法評価学(身体・老年期障害)		選必(1)															
		作業療法評価学演習Ⅰ(身体・老年期障害)			選必(1)														
		作業療法評価学演習Ⅱ(身体・老年期・発達障害)				選必(1)													
		作業療法評価学(精神障害)				選必(1)													
		作業療法評価学演習Ⅲ(精神障害)				選必(1)													
		作業療法評価学(発達障害)				選必(1)													
		作業療法評価学(高次脳機能障害)				選必(1)													
		作業療法評価学演習Ⅳ(高次脳機能障害)				選必(1)													
	作 業 療 法 治 療 学	身体障害作業治療学						選必(2)											
		精神障害作業治療学						選必(2)											
		発達障害作業治療学								選必(2)									
		老年期障害作業治療学								選必(2)									
		高次脳機能障害作業治療学								選必(1)									
	療 作 地 法 業 域	生活環境学(作業療法)						選必(2)											
		地域作業療法学								選必(2)									
	作 業 療 法 臨 床 実 習	臨床見学セミナー(作業療法)		選(1)															
		臨床見学実習(作業療法)		選必(1)															
		臨床評価学セミナー(作業療法)							選(1)										
		臨床評価学実習(作業療法)							選必(4)										
		臨床治療学セミナーⅠ(作業療法)											選(1)						
		臨床治療学実習Ⅰ(作業療法)											選必(8)						
		臨床治療学セミナーⅡ(作業療法)											選(1)						
		臨床治療学実習Ⅱ(作業療法)											選必(8)						
	応 用 作 業 療 法	作業療法研究法								選必(1)									
		作業療法研究法演習(卒業研究)											選必(4)						
		作業療法管理学															選(1)		
		作業療法特別セミナー															選(3)		
		特別支援教育概論															選(1)		
		箱づくり法															選(1)		
		身体・老年期障害作業治療学特論															選(1)		
		精神障害作業治療学特論															選(1)		
		発達障害作業治療学特論															選(1)		
	シ ョ ー ン ハ ビ リ リ	生活行為向上リハビリテーション論							選必(2)										
		国際医療支援論															選(1)		
	合計単位数		149	23	21	17	26	16	12	34									
	卒業要件単位数		129	17	16	16	18	13	12	22									

5. 教育マップ

(1) 教養科目

教養科目では、直接人を相手とする医療専門職に必須である豊かな人間性を培い、同時にリハビリテーションの知識と技術とが現代社会で果たす意味を学生が自覚できるようになることを目指しています。学生がリハビリテーション医療従事者としての使命感とやり甲斐とを、まず明確にしてほしいと願っています。具体的には、学習をはじめると同時にまず身につけておくべき態度と技術を教える「導入基礎科目」、そして人間・社会・自然に関する幅広い理解を得るために、「人間の理解」、「社会の認識」、「自然の探求」という科目区分を設けてあります。また、英語能力の多面的な修得のために、3年次まで多くの授業科目が開講されます。

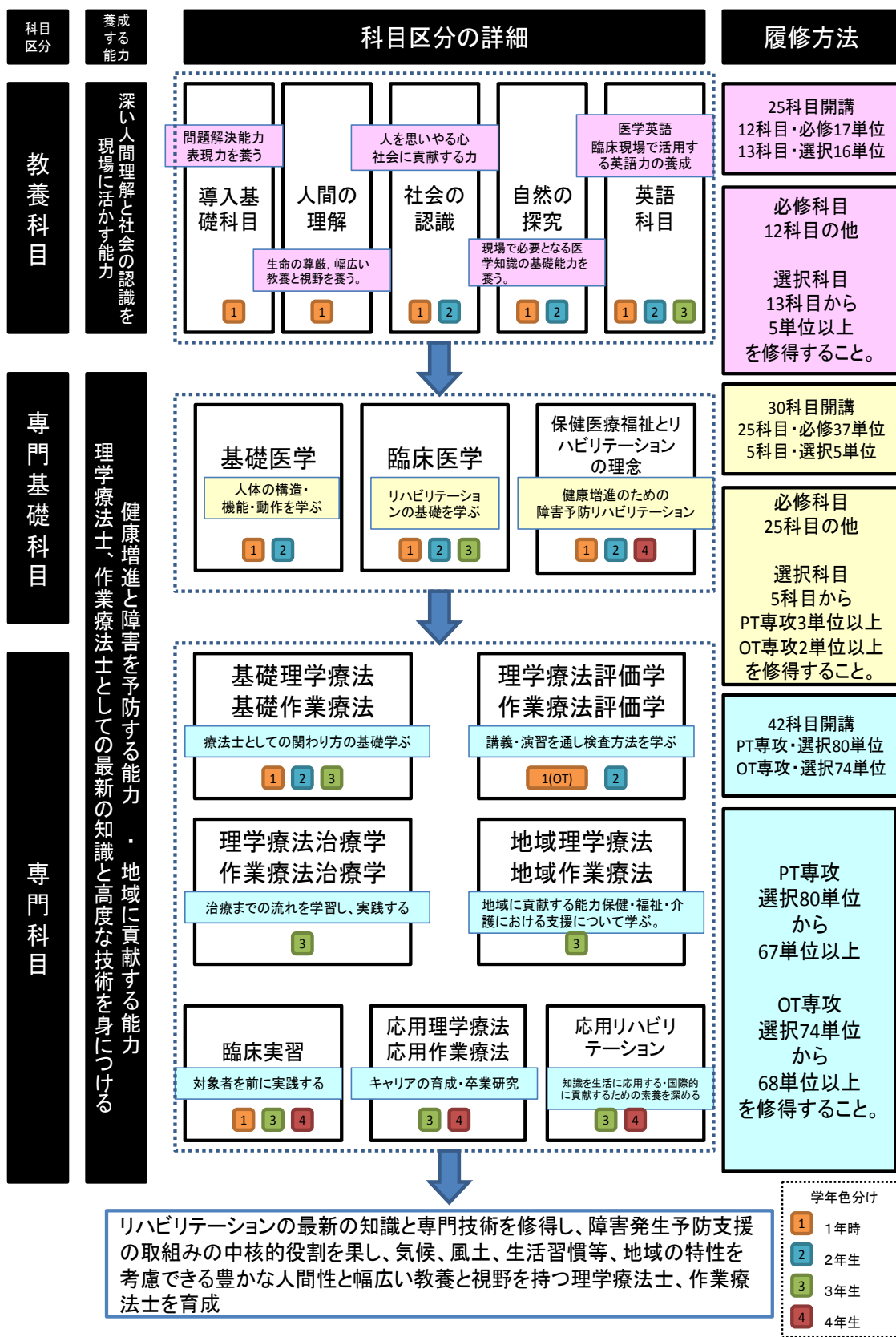
(2) 専門基礎科目

専門基礎科目は、専門科目を学修する前に、その基礎となる事柄を修得します。「基礎医学」11科目、「臨床医学」12科目、「保健医療福祉とリハビリテーションの理念」7科目の3区分からなります。

(3) 専門科目

専門科目では、理学療法士、作業療法士になるために必要な専門的知識と技術を学修します。「基礎理学療法・基礎作業療法」、「理学療法評価学・作業療法評価学」、「理学療法治療学・作業療法治療学」、「地域理学療法・地域作業療法」、「理学療法臨床実習・作業療法臨床実習」、「応用理学療法・応用作業療法」、「応用リハビリテーション」の7つの科目区分からなり、理学療法学専攻42科目、作業療法学専攻42科目の授業科目があります。

健康科学部 リハビリテーション学科



6. 履修登録

- (1) 履修登録は、学期ごとに所定の期間内で、各自マークシートにより登録してください。登録期間等の詳細については、掲示等で周知します。
- (2) 各年次に配当した授業科目は、原則としてその年次に履修してください。
- (3) 上級年次に配当している授業科目を下級年次の者は履修できません。ただし、上級年次の者が下級年次に配当している授業科目を履修することはできます。
- (4) すでに単位を修得した授業科目を、再度重複して履修することはできません。
- (5) 原則として、同一期の同一曜日、同一授業時間に2科目以上を履修登録することはできません。

7. 在学年限

8年を超えて在学することはできません。

8. 休学期間

- (1) 休学期間は、1年以内とします。ただし、特別の理由がある場合は、1年を限度として休学期間の延長を認めます。
- (2) 休学期間は、通算して4年を超えることはできません。
- (3) 休学期間は、前記7. の在学年限には算入しません。

9. 卒業認定方法

本学に4年以上在学して、前記2. の卒業要件に従って所定の単位を授与された者について、教務委員会で審議の上、学長は教授会の意見を聴いて卒業を認定します。

10. 学位の授与

卒業を認定した者には、次の学位を授与します。

- (1) リハビリテーション学科 理学療法学専攻 学士 (理学療法学)
- (2) リハビリテーション学科 作業療法学専攻 学士 (作業療法学)

11. 取得資格

本学健康科学部リハビリテーション学科、理学療法学専攻および作業療法学専攻は、「理学療法士及び作業療法士法」第11条第1号及び第12条第1号に定める学校として指定されており、卒業後は、理学療法士又は作業療法士の国家試験を受験する資格が付与されます。

Ⅲ. 試験について

1. 試験の種類

試験には、定期試験、追試験および再試験があります。

(1) 定期試験

- ① 学期の一定期間内に試験を実施します。ただし、期間外（授業等）で行う場合には授業担当教員の指示に従ってください。
- ② 試験期間および試験時間割については、掲示でお知らせしますので確認してください。

(2) 追試験

- ① 病気、忌引、その他やむを得ない事由（*参照 P17）で定期試験を受けることができなかった学生は、所定の手続きを経て追試験を受験できます。
- ② 追試験を受けようとする学生は、その理由を詳細に記した「公認欠席願」に診断書又は証明書等を添付して学務課窓口に提出し、学務課が公認欠席であることを承認後に、「追試験受験願」を掲示により周知された所定の期日までに総務課窓口に願い出てください。なお、追試験の受験理由は厳しく制限されるので、事前に授業担当教員に相談してください。
- ③ 追試験の日程は、授業担当教員と協議の上、掲示でお知らせします。
- ④ 追試験の成績評価は、原則として定期試験と同様に評価されます。

(3) 再試験

- ① 再試験は、定期試験および追試験で60点未満の不合格となった場合、および私事により定期試験を欠席した場合に、願い出によって行われます。
- ② 再試験を希望する者は、定期試験成績通知後、指定した期間内に受験料（有料：1科目3,000円）を添えて「再試験受験願」を総務課窓口に提出してください。
- ③ 再試験の日程は、掲示でお知らせします。
- ④ 再試験で合格した場合の成績評価は、C評価とします。

2. 受験資格

各授業科目の時間数の3分の2以上出席しなければ、試験を受けることはできません。授業時間数が8回の場合は3回、15回の場合では6回欠席すると受験はできなくなります。授業の出欠管理は、必ず学生の自己責任で行ってください。

3. 受験上の注意

- (1) 試験に際しては、学生証を机上に提示してください。学生証を忘れた場合は、総務課で「仮学生証」の発行(有料：300円)を受けてください。仮学生証がなければ受験できません。
- (2) 試験開始後30分以上遅刻した場合は、入室することができません。
- (3) 試験開始後30分以内と、試験終了10分前は退出することができません。
- (4) 学生証、時計および筆記具以外のものを机上に置くことはできません。これ以外の所持品は(音の出る機器は電源を切ったうえで)鞆の中に入れて座席の下に置いてください。なお、携帯電話を時計代わりに机上に置くことはできません。
- (5) 受験中は監督者の指示に従ってください。指示に従わないときは退出を命じます。
- (6) 受験中は静粛を保ち、退出後も他の受験者の迷惑にならないよう静かに行動してください。
- (7) 配付された答案用紙等は、すべて提出しなければなりません。

4. 不正行為

- (1) 試験における不正行為では、答案を無効とし、試験の評価は「D」とします。さらに、懲戒処分が課されます。
- (2) 試験には、定期試験のほか、小テストや中間試験等も含まれます。なお、レポートの盗用や剽窃(ひょうせつ)についても、不正行為として厳しい処分をもって対処します。

* 追試験のやむを得ない事由について

次の理由で定期試験を欠席した場合は、追試験を受験することができます。

- イ. 本人の病気または怪我 (医師の診断書が必要)
- ロ. 公共交通機関の遅延 (遅延証明書が必要)
- ハ. 忌引き(2親等以内の親族(3親等の祖父母は含む)の死亡とし、法事は含めない) (忌引きを証明できる書類が必要)
- ニ. 災害(台風、水害、雪害、火災等) (被災証明書又は証明できるものが必要)
- ホ. その他、本学がやむを得ないと認めたもの。

IV. 成績評価について

1. 成績評価の方法

- (1) 授業科目の成績は、それぞれの科目の評価方法により判定します。
- (2) 成績の評価は、「S」～「D」に区分し、「D」を不合格とします。
- (3) 授業科目の単位は、当該科目が終講し、次の表の学習成果の質に応じて評価した上で、「S」から「C」の合格判定を得たときに認定されます。

評価	学修成果の質
S	授業科目の到達目標のすべての面で秀逸な学修成果をあげた。
A	授業科目の到達目標のすべての面で優秀な学修成果をあげた。
B	授業科目の到達目標のすべての面で良好な学修成果をあげた。
C	授業科目の到達目標のほとんどの面で合格となる最低限の学修成果であったが、良好な面がいくつかあった。
D	授業科目の到達目標のほとんどまたはすべての面で合格となる最低限の学修成果はなかった。

2. 評価区分および GPA 制度

本学では、成績を数値化することで、学習効果を客観的に把握するために、GPA (Grade Point Average) 制度を導入しています。

修得単位数という「量」だけでなく、学習状況の「質」を判断できる指標を提供することにより、学生の学習意欲の向上や学習の計画などの自己管理に資することを目的としています。

詳しくはホームページの「在学生の方」→「学生生活について」→「GPA 制度の導入について」をご覧ください。

評価区分と得た成績の点数に対する GP (グレード・ポイント) は次のとおりです。

点 数	評 価	判 定	G P
100点～90点	S	合格	4
89点～80点	A	合格	3
79点～70点	B	合格	2
69点～60点	C	合格	1
59点以下	D	不合格	0

※ 再試験で合格の評価は、点数にかかわらずすべて「C」評価とします。

3. GPA の対象外

- (1) 編入学又は転入学における単位認定科目
- (2) 本学入学前に修得した単位認定科目
- (3) 他大学等との単位互換等で修得した科目
- (4) 臨床見学実習(理学療法)、臨床評価学実習(理学療法)、臨床治療学実習Ⅰ(理学療法)、臨床治療学実習Ⅱ(理学療法)、臨床見学実習(作業療法)、臨床評価学実習(作業療法)、臨床治療学実習Ⅰ(作業療法)、臨床治療学実習Ⅱ(作業療法)

4. GPA の算出方法

(評価を受けた授業科目のGP×その科目の単位数)の合計/評価を受けた科目の単位数の合計

※ GPAの最高値は4.00となります。

5. GPAの算出例

授業科目	評価	GP(a)	単位数(b)	a×b
〇〇学	B	2	2	4
□□概論	S	4	2	8
△△基礎論	A	3	1	3
◎◎演習	C	1	1	1
◇◇学(選択)	D	0	1	0
計			7	16

分子:(評価を受けた授業科目のGP(a)×その科目の単位数(b))の合計=16

分母:評価を受けた科目の単位数の合計=7

GPA=16/7=2.29(小数点第3位を四捨五入)

※ S評価が多いとGPAは高くなり、逆にC評価が多くなるとGPAは低くなります。特にD評価があるとGPAに大きな影響があることに注意してください。

6. 成績の通知

各期終了後、本人には授業科目別の成績を掲示するほか、学費負担者には、評価区分、学期GPA及び通算GPAを記載した「学業成績記録」を郵送で通知します。

V. 科目の概要について

1. 教養科目（理学療法学専攻、作業療法学専攻共通）

学びの技法

問題・課題の本質をまず明確にし、それに対する従来の解決法を批判的に理解し、その上で自ら能動的・創造的に思考し、有効な対処ができる能力を身につけさせる。そのために、教員による一方的な講述という形式をとらず、学生の積極的参加を促し、能動的に学習させる。自力での発見的学習、問題解決型の学習を実践させる。授業では、グループでのディスカッション、ディベート、意見取りまとめなどをやらせる。こうした学習法は学生にとって初めて経験するものであるだけに、それらの手本となる現実のプロセスを示してあげる必要がある。まず、問題発見の端緒となる参考文献・先行研究の探し方、その入手方法などを教えるため、図書館利用方法やコンピュータスキルなどを身につけさせる。さらに、文献資料の扱い方、調査などの実証的方法、自然科学の実験など、学問・科学の歩みの中から、精緻な方法論を拾い出してモデルを示す。

理解と表現

教育と研究は、適切なコミュニケーション能力なしには成立しない。まず最初は、言語を文法的に正しく使用することから始まる。しかし談話は単なる文の羅列ではなく、全体として意味をなすよう、順序立てられ筋道を立てられている。こうした言語の駆使能力がコミュニケーションの能力である。しかし、コミュニケーションは単なる情報や知識のやりとりには尽きない。そのためには、たとえば人の話を冷静に聞くことができねばならないし、相手が誠実に答える気をそがれるような仕方で質問してはならない。一言で言えば、社会の中で正常に他人と交わり、共感を持って共生していく対人関係の維持・構築能力が不可欠である。この授業は学生にこのような広い意味でのコミュニケーション力をつけさせる。

社会貢献の方法と実践

学習の動機を明確に与えることは、学生の関心と努力を引き出し、集中させるために不可欠である。一般的にも言えることであるが、特に医療従事者となる者にとっては、学習動機はリハビリの対象となる人の喜びであり感謝である。医療従事者のこうした社会的承認こそ、永続的な動機となる。それらの動機を醸成させるために、ボランティア活動に際して必要な注意点とコーディネイトの理論について学ぶ。

情報学

コンピュータスキルの基礎を修得し、学習に際して自在に活用できるようになることを目標にする。具体的には、OSの基本を学び、ワード、エクセル、パワーポイントの基本操作を学習し、電子メールの利用法、インターネットの利用法、文献検索の方法、情報の収集と管理、情報倫理などを学ぶ。また、効果的なレポートやプレゼンテーションの作成に役立つ文書・図表の作成方法なども習得させる。

心理学

「心の科学」としての心理学の歴史は浅く、当初は実験と観察を通じて始まり、近年では、生活の場における人間の心理的理解を深めて、臨床の場で諸々の心理学の知見を生かしていこうといった試みも増えている。リハビリテーション心理臨床の基礎となるような「基礎心理学」について学ぶ。本講義では、①心理学の入門編として様々な心理学の知見を概観、②心理学の視点や考え方を理解し、さらに③臨床的応用の可能性について質疑応答を取り入れ、受講生と議論を深めていく。そのために、学生が主体の双方向的な講義を展開する。

倫理学

人間は対人関係の中で、あるいは社会に対して、いかに振る舞うべきか。これを主題に論じるのが、倫理学である。これは生の意味と価値をも問うことになる。その意味では、人間を問う問いの中でもっ

とも根源的な問題を扱う。倫理学の目指すところは実践的であるが、倫理学の構成・内実自体は理論的である。人類の倫理思想のうち、代表的な考えを取り上げ、医療現場で倫理的諸問題を考える際の強固な基礎を築く。

応用倫理学

倫理学の諸理論とその歴史的展開を学んだ上で、生活実践の場面で出会う具体的な諸問題を取り上げる。まず、当然本学の学生にとっては生命倫理の諸問題が重要になるが、論理にのみ走らず、医療現場を強く意識しつつ自ら主体的に考える訓練をする。その際、医療を施す意義を自明視するのではなく、人間はいずれ死するという根本を見据えながら生命に関わる倫理を根源から考えさせる。医療職の職業倫理も卒業後に現場で実地に身につけるのではなく、大学での教育の中で明確に意識づけたい。リハビリの対象者は、第一義的には医療技術の対象なのではなく、なによりもまず目的自体としての、人格的交わりの相手である。究極的価値としての人格の尊厳というこの自覚から出発しない医療は、対象者を結局はモノとしてしか扱わないようになるからである。

思想の歴史

生きる上での人間の叡智は、哲学と宗教の中に結晶化している。伝統的には、それが人間生活を導く大柱をなしてきた。人間の行為規準、生活指針が多分化し不分明になりつつある現代で、人は自己の正をも半ば意識的に構築していかなければならない。こうした努力は決して真空の中で論理的になされるわけではない。世界中で蓄積されてきた生の叡智を学ぶ中で、現代になお生かす知恵を探し求め、正しい生き方の自覚的形成を促す。

歴史学

現代世界とそこに生きる我々の来歴を知り、人類史のベクトルがどのような将来を指し示しているかを知ることは、現在に生きるわれわれの自己理解を深め、かつ今後の社会と文化の方向性を見極めな

がらいかには人生を構築するべきかを考える上で、決定的な重要性を持つ。本学で教育する歴史学は、従来しばしば見られたような歴史の細目を教える暗記型の歴史学ではなく、上記の目的を強く意識し、かつそれに即したトピックを厳選して現代に生きる人類としての自己理解を深める内容とする。かつ同時に、自らが生きる場である地域社会にも目配りができるように、北海道の歴史をも内容に含める。

社会調査法

社会現象の正しい理解や問題の解決には、社会現象を実証的にとらえる方法が不可欠である。それが、信頼に足る科学的データを得る社会調査法である。この授業では、まず社会調査（フィールドワーク）の意義とその多様な方法を学ぶ。つぎに、自らの研究課題に適した社会調査を立案し、調査票を設計できるようにすることをめざす。最後に、得られた調査データを、統計的方法を理解したうえで、コンピュータ統計ソフト SPSS を用いて分析する技能を修得する。当然のことながら、すべては調査倫理に立脚していなければならないのであって、この点は繰り返し教授する。

現代の社会と人間

前近代社会と比べて、近現代社会の特徴は、社会分化が著しく進展したこと、それによって同一の社会内部にあってさえ現実認識に関しても価値規範に関しても多分化が進んだことである。これがもたらす重要な帰結として、確固たるアイデンティティ形成が難しくなったこと、それに伴って人間と人間とが全人格的に共感し合い理解し合うコミュニケーションが成立しづらくなり、緊密に連帯した人間関係の構築が困難になったことが挙げられる。こうした厳しい事実認識の上に立って、それらの諸困難を乗り越える道筋を探求する。

北海道の医療と社会・経済

これからの医療者は、単なる職業的技術者であってはならず、その視野は歴史的にも、同時代の世界に対しても広く開かれたものでなければならない。

しかし人間は同時に具体的な閉じられた社会の中に生きているのであり、自らの現場である地域社会に関する広く深い認識を持たなければならない。そのために、足下の北海道の社会と歴史、なかんずく医療と経済について、詳細な知識を持っていなければならない。自らが現実に生きる地域社会の問題と課題を的確に見て取り、それを克服して地域社会に貢献する際の土台を形成させるのが、本講義の狙いである。

文化人類学

それぞれの社会は異なる社会的基礎と条件の下に成立している。ところがそのような諸社会が時間的・空間的に交わりながら共生して行かざるを得ないのが現代世界である。そこで求められてくるのが、異質な他者を寛容に受容していく努力である。そのためには、多元的な世界を知り、多くの可能なあり方のひとつとして自己を相対化するとともに、その線上で同じく他者をも可能なあり方のひとつとして認める広い視野が必要である。本講義は、グローバル化した現代世界の多元性・多様性を理解させ実感させることを目的とする。

生命科学概論

生命科学は人間を中心とした生物学であり生命に関する学問分野です。現在、生命科学は医療、農業、環境問題など様々な分野との関わりがあって私たちの生活に大きな影響を与えています。生命の誕生から進化の過程を学び、総ての生物に共通する遺伝子の役割を学び、とりわけヒトの生命現象のしくみや、健康・疾病に関する最新の情報を含め、老化、癌化、死のメカニズムについて学習する。

自然科学概論

自然科学分野の学科を対象とした基礎教育科目ゆえ、専門科目との連携が重要となる。本講義では、医療人としてこれからの時代を担うために必要な科学知識、特に物理学と生体との関係、さらに地球環境と人間工学の分野を広く概観する。また、生活環境の安全性に関わる諸問題の抽出と科学進歩に

相対する負の遺産について学ぶ。本講義を通して、自然科学量の自由な取扱いや、物の道理、すなわち基本的物理現象を説明できる能力を養う。

統計学

様々な資料やデータを整理し、推定や検定を用いて分析を行い、結論を得ることは統計学の重要な役割である。自然科学や社会科学など他の学問領域でも多く活用されており、データを扱う学問を修める者には必要性の高い学問である。本講義は多くの統計的手法のうち比較の見聞きし、使用する頻度の高い基本的な知識と手法について学習し、データ分析の具体的手法を学ぶ。

生物学

地球上には共通の祖先から進化した多種多様な生物が存在し、様々な環境に適応して生活している。私たち人間も多様な生物の一種にすぎない。では、生物とはなんだろうか、生物にはどのような特徴があるのだろうか。本講義では、この問いかけに答えられるよう、生命体を構成する基本単位である細胞の特徴やその働き、生命現象のしくみについて学ぶ。高校で生物を履修していない学生でも分かるように、最新のバイオ技術を取り入れながら生物学の基本を学習する。

基礎生化学

生化学は、生命現象を「物質」や「分子」のレベルから理解し、核酸やタンパク質はじめ生命を構成する分子の機能や構造を明らかにする学問です。健康と病気を正しく理解するには分子レベルで生命現象や生命体を構成、維持する物質を化学的な視点で理解することが必要です。本講義では必要とする、「基礎的な生化学＝生体分子の構造と生体内における変化＝代謝」を学習します。最先端の技術を用いた医学・医療の基礎を学び、生活習慣病やガンなどの原因や治療法などを理解する。

物理学

自然現象を理解し、物の道理や仕組み、さらには機器の動作原理を知るには物理学的思考が必要となる。本講義では、我々の身近にある物体や現象を取り上げ、具体的には力と運動、振動と波動と音、熱と光、電磁気現象などを対象として、その基本用語や関連する法則、さらには解析手段を学ぶ。また、生命や生体との関わり合い、すなわち人の動作分析や医療機器の安全操作等にまで立ち入った講義を展開する。

スポーツ・レクリエーション学

スポーツ・レクリエーションは体を動かすという生来人間が持っている欲求に応えるだけでなく、爽快感、達成感、他者との連帯感等の精神的な充足、健康の保持増進、青少年の人間形成に資するなど、心身両面に働きかけることができると考えられる。軽～中強度の運動が中高齢者の認知機能やメンタルヘルスに好影響を与えることや子供の運動習慣と学業成績に関連があることなど、スポーツやレクリエーションを通じて体力以外に及ぼす効果も述べながらそれら活動の意義と現状の社会環境・機会等がどのようにあるかを学ぶ。

基礎英語

コミュニケーションは、様々な形で行われる。本講義では、英語の4つの技能（聞く、話す、読む、書く）の基礎的な力をバランスよく鍛えながら、理学療法、作業療法の各専門分野を学習する上で、習得しておくべき基礎的専門用語の拡充と定着を図ることを目標としている。常に、将来の臨床現場を意識した、素材とアプローチで、内発的な動機付けを図りながら、英語への苦手意識を払拭し、より積極的に自律した学習に向け、自信と学ぶ力を身につける。

英会話

臨床の現場では、様々な言語・非言語的コミュニケーション能力が求められる。患者の心に寄り添う言葉かけ、症状を聞き出す問いかけ、分かり易い説

明や的確な指示、より良い療法を決定していくためのディスカッションなどである。講義では、臨床現場で活用できる、簡潔で分かり易い表現方法を学ぶ。また、英語の4つの技能に関連させ、様々な双方向のコミュニケーション活動を体験しながら、言葉を介して、相手とより良い関係性を保つコミュニケーションの大切さを知り、その醍醐味を実感することを目指す。

英語ライティング

ライティングは、自己表現の一つの方法であり、その習得には、目的意識的アプローチと、一定の時間を要する。本講義では、カルテやメモ、症例の要約や療法への意見等、臨床の現場に即した複数の書式や内容に慣れさせることを目指す。また、プレインストーミングから文章の組み立てまでのステップを、練習を通して身に付けてもらう。より自然で、的確で、簡潔な文章表現ができるように、考えをまとめて書き表す力を養成することを目指す。

保健医学英語Ⅰ

臨床場面で、理学療法士・作業療法士として働く際に、根拠のある選択をし、より良いケアを提供するために、英論文を読む力は必要不可欠である。保健医学英語Ⅰでは、その前段階の能力として、医学・医療系論文のアブストラクトの内容をすばやく把握できるようにさせることをねらいとする。そのためにまず、英論文の正確な読解のために必須となる、様々なリーディングスキルに習熟させる。さらに、英論文のアブストラクトの論理構成をつかみ、その研究の特徴点・重要点を捉え、話し合いにつなげることで、アブストラクトをさらに一歩深く理解する力を養成したい。

保健医学英語Ⅱ

保健医学英語Ⅱでは、「保健医学英語Ⅰ」で学んだことをさらにもう一段階進めて、臨床現場で実際に扱われている英論文を複数取り上げ、保健医療論文のフォーマットに慣れさせるとともに、Abstract、Methods、Results を的確に読み取る力の養成を

目指す。人間力を備えた PT・OT が、それぞれの専門分野で自律して最新の研究や療法を学び、その専門性を磨きながら、広く国内外のプロフェッショナルと交流し、患者や家族を支え、社会に貢献する人材となることを目標とする。

2. 専門基礎科目（理学療法学専攻、作業療法学専攻共通）

人体構造機能学Ⅰ（筋・骨関節系）

基本的な運動機能や日常生活活動の改善を図るリハビリテーション専門職として、人体の形態的特徴や構造（解剖）、及びその機能や仕組み（生理）を理解することは必須である。特に人体の筋・骨関節に関する構造や機能の知識は、身体運動の帰結を説明する思考過程において、人体の構造と機能を関連づける最も基本となる学問である。本科目では、身体各部の主要な骨、関節、骨格筋について、一般的な構造と機能を理解することを目的として学習する。

人体構造機能学Ⅰ（神経系）

人体構造機能学Ⅰは理学療法と作業療法を学ぶ上で基礎となる人体の構造（解剖）と働き（生理）を関連付ける学問である。本科目では特に大脳新皮質、間脳、脳幹、小脳、脊髄などのいわゆる脳・脊髄に分類される中枢神経系と、脊髄神経から派生する末梢神経系および感覚器系についてそれぞれの構造と機能を重点的に学習する。またマクロ解剖だけではなくミクロ解剖に関しても理解を深め、神経組織を構成する細胞間の関連性、神経細胞およびグリア細胞内の細胞小器官が各細胞内でどのように機能するかを学習する。

人体構造機能学Ⅰ（内臓・脈管系）

医学系専門職として理学療法と作業療法を学ぶ上で基礎となる、生命の維持に非常に重要な働きをもつ呼吸器と循環器や、消化器、泌尿器の構造（解剖）と機能（生理）についての知識とその役割を学

び、生命が恒常性を維持する仕組みの一端を知る。本科目では生体内部の構造と働きについて学習し、生体内で起こる生理学的反応への考察力を高めることを目的とする。さらに運動における呼吸循環系の役割に対する理解を深めることも目的とする。

人体構造機能学Ⅱ（筋・骨関節系）

「人体構造機能学Ⅰ（筋・骨関節系）」で学習した骨、関節、骨格筋の一般的な形態的特徴・構造や機能に関する知識をもとに、学生同士が実際に触診や関節運動を体験することによって、骨、関節、骨格筋の構造的側面と機能的側面の関連性についての理解を深めることを目的とする。また、多くの学生同士が触れあい、演習を通して多様な骨関節、筋を触診することで、学生自身が能動的に観察力、思考力を養い、学問的な探究心の向上を目標とする。

人体構造機能学Ⅱ（神経系）

「人体構造機能学Ⅰ（神経系）」で学習した神経系における人体構造（解剖）と働き（生理）を基に、神経系が行う伝導・伝達・統合の仕組みを模型や標本などを用い、顕微鏡レベルから肉眼解剖レベルまで演習を中心に理解を深めることを目的とする。またそれら神経系の働きが実際の人体でどのように機能しているのか、またこれら神経解剖学の知識を理学療法および作業療法場面でどう活用するかを、理論だけではなく実技なども通し、臨床に生きる知識となるように理解を深める。

人体構造機能学Ⅱ（内臓・脈管系）

「人体構造機能学Ⅰ（内臓・脈管系）」で学習した基礎的な知識を基に、生命が恒常性を維持する仕組みを更に深く理解しイメージ体験することを目的とする。本科目では生体内部の構造と働きについて、特に呼吸循環器系について、心電図計測や呼吸機能検査、血圧・脈拍・呼吸数などのバイタルサイン測定など、学生同士での演習を通して、各種バイタルサインの意義や理論的考察、生命の恒常性の理解を深め、知的探究心を醸成する。

人体構造機能学実習

「人体構造機能学Ⅰ、Ⅱ」で学んだことをふまえて、人体に直接手を触れ、観察することで、その構造を三次元的にイメージし、基礎的な知識をより確実に習得し、更に科学的な基礎能力を身につけることを学習目標とする。特別な機会である本実習を通じて、生命の尊厳および医療専門職としての使命を自覚し、真摯な姿勢で学ぶことが重要である。

運動学

「人体構造機能学(筋・骨関節系)」で学習した知識に加え、生体力学的観点から、人間の身体運動に関する基礎を学ぶ。筋や骨、関節構成体の構造と、モーメントやテコの観点から身体活動がいかに効率良く、合理的なシステムに基づいて行われているか理解を深める。また運動学的分析の手法を学び、人間の動作を客観的に分析できることを目指す。さらに、姿勢制御や運動学習といった神経生理学的な観点からも、運動がどのように行われ、学習されているのか、その基礎を学ぶ。

運動学演習

骨、関節、神経、筋機能などの基礎的な知識を基に、ヒトの各種姿勢および歩行、起立、起居などの基本動作の理念型を理解し、様々な運動・動作・活動に対して観察・分析の仕方を学生同士での演習を通して学習する。更には、運動や動作の観察から人体の機能や構造に対する理解を深める。また、運動による各臓器・器官の反応(生体反応)、高齢者や個々の疾患に対する姿勢や動作の特徴についても理解を深め、運動機能の回復・予防などといった応用的知識を身につける。

老年学

本科目では、人間の生理的かつ精神心理的な加齢変化を主とした老年医学、高齢者を取り巻く社会構造や各種の社会保障制度を中心とした社会老年学、やがて訪れる老いと死について学ぶ死生学、高齢者の健康と生活を支える高齢者リハビリテーションについて学び、高齢者が抱える健康と生活の問題を

多面的に理解するとともに、高齢者を思いやる心を醸成して、高齢者の増加する地域社会が持つ問題の解決能力を養う。

人間発達学

胎生期から成人に至るまで、人間の成長は人間の進化の縮図とも言われる。人間の成長における発達段階を理解することは、原始的な生体反応から成長し完成された生体活動に至るまでの過程や一つ一つの現象のメカニズムを学習することである。様々な疾患によってもたらされる障害の克服のために、人間の発達段階を理解し、それを利用して理学療法・作業療法を展開させる場面も多い。人間の発達を系統発生と個体発生の両面から検討する。人類の起源と進化の問題にふれ、人間の身体の形態的特徴と行動様式について調べる。次に、個体発生の視点から、ヒト新生児の特異性と人間の子どもの成長期の特徴に着目し、人間の発達特性とその意義について学習する。

精神障害基礎論

近年患者数が増加し「5大疾病」に加えられることになった精神疾患ならびにその障害の知識は国民の健康へのアプローチに際して理解が急務で、かつ重要度の高いものである。近年は気分障害や統合失調症の生活障害と当事者の予防・精神科リハビリテーションへの注目も集まり体系的な学びが必要であることから、本講義では各種の症候学、症状学など、対象者理解につながる基本的な知識と、役立つ支援につながる実例的なポイントを学習する。

薬理学概論

本科目では、まず、薬理作用を理解するための生物学的な基礎知識の習得に重点を置き、分子レベル、細胞レベル、個体レベルで、薬の作用のメカニズムを説明して、生体内における薬物の吸収、分布、代謝、排泄という薬理動態や有害反応を学ぶ。リハビリテーション対象者が投与されている主要な薬物を取り上げ、投与方法によっての違いも理解することにより、臨床講義や実習で必要とされる薬物治療

の基礎を習得できることを目指す。

医学概論

医学・医療の歴史的経緯を学ぶことにより、現代の医学・医療のあり方を見つめ、医療人としての基本的な心構えや医の倫理について理解する。また、これからの医学・医療に求められるものや進むべき方向性を常に考える動機を醸成する。また、チーム医療を推進するため、日本の実情に即した他職種との協働・連携の在り方等についても学習する。そしてチーム医療におけるリハビリテーションの位置づけと役割について理解を深め、医療チームの一員として治療に参加する基礎を培う。

リハビリテーション概論

第3の医療として発したリハビリテーションの、定義、歴史、理念および障害の分類について学習する。疾病と障害との関連性や違いなども学習する。また、主要なリハビリテーション関連疾患を取り上げて、リハビリテーションチームの役割と、医療機関で行われている医学的リハビリテーションの具体的方法と、社会や地域を含めた包括的なリハビリテーションの概念と具体的方法も講義する。また、医療・福祉・保健領域におけるチーム医療の重要性と関連職種の業務について理解する。

周術期医療基礎論

近年、周術期や急性期治療の一環として、リハビリテーション手法や技術がその一部を担う機会が増えつつある。また、早期離床回復の為にもリハビリテーション施行の早期化が図られる必要がある。本科目では、癌や急性呼吸不全、外傷、熱傷などといった周術期ならびに急性期リハビリテーションにおいてかかわることの多い疾患について、その病態、治療に関して学習するとともに、またその中におけるリハビリテーションの役割を理解し、チーム連携に対応できる能力を養う。

内部障害基礎論

心臓疾患・肺疾患・腎臓機能障害といったリハビ

リテーションでかかわることが多い内科疾患全般について、原因や病態を学び、その発生機序および治療過程全般を学習する。またそれぞれの疾患における、診断基準、診断のための各種理学的検査や生理検査、臨床症状について学ぶ。さらに内科疾患による障害像を理解し、各疾患の内科的治療、その中におけるリハビリテーションの役割や方法に関して基礎的理解を深める。

運動器障害基礎論

骨・関節・神経・筋・軟部組織などの運動器における障害の基礎知識について学習し、運動器障害と理学療法士および作業療法士の関わりについて理解することで、医療専門職として運動器に関する幅広い教養を身に付けることを目的とする。具体的には、四肢・体幹の疾患や外傷、代謝性疾患、絞扼性神経障害などの運動器障害について病態、理学所見、診断方法、臨床症状、治療法について学び、リハビリテーションの基礎的理解を深める。

中枢神経障害基礎論

中枢神経（脳、脊髄）、末梢神経、筋の各疾患を対象として、各神経疾患における特異的な主要症候、補助検査などについて解説する。さらに、リハビリテーション（理学療法、作業療法）の対象となる、日常臨床で遭遇する可能性の高い神経疾患（脳血管障害、パーキンソン病、小脳系疾患、認知症、多発性硬化症、Guillan-Barre 症候群、筋萎縮性側索硬化症）を中心に、その病因、病態、診断、治療について学習し各疾患への理解を深めることを目的とする。

発達障害基礎論

発達期に生じた障害を有する小児に対して、臨床場面で合理的なリハビリテーションアプローチを実施するため、代表的な各疾患の病態の基礎知識について学習するとともに、小児リハビリテーションの留意点、発達障害の概念、療育の概念・視点についても理解する。また、障害を乗り越えて社会への適応を図ろうとする対象児を支援する上では、医学

的視点のみならず、心理・社会・教育的視点も重要であることを理解し、幅広い視野を培う。

医用画像解析学概論

医用画像は特に工学技術の進歩によって、より鮮明にリアリティが高く視覚的に捉えることができるようになり、リハビリテーションの障害診断や治療効果判定などにも広く用いられている各種撮像法の基本原理と画像診断の理論を学ぶ。各論においては理学療法、作業療法で扱う代表的疾患の画像を供覧するが、画像に関する知識は、理学療法士、作業療法士として患者の病態を把握し、治療プログラムを作成する上で、重要な基礎となる。また、医師や他の医療スタッフと共通の認識を持ち、コミュニケーションを図るためにも必要な知識である。

臨床心理学

過去、心の深層に人はどのように関わってきたのか。臨床研究法、人格理論、心理査定、心理的援助に関わる倫理事項を学んだ後、心理療法に焦点を当て、精神分析、分析心理学、人間主義的アプローチ、認知行動的アプローチ、家族療法等の実際を講義および体験学習を介在させ展開する。自閉症、てんかん、知的障害、肢体不自由、脳外傷、脳血管障害、認知症等、リハビリテーションに関わる臨床事例を絡ませ、心の援助のありようについて受講生と共に考え、人間そのものについての理解を深めていく。講義にあたっては視聴覚素材を多用し、当事者の生の声を聴く。抱く思いの内容をありのままとらえることで、心の理解を深めていく。家族支援にも重きを置き、現状の把握と援助者の課題について探求する。

医療安全管理学

人の命を扱う医療現場においては、患者ならびに医療従事者が有害事象を起こさない、また会わないようにするための対策が常に求められている。医療機器の危険性や特徴を理解し、安全な取り扱いを身に付けることは医療人にとって必須条件となる。本講義では、医療機器の取扱いと安全管理、医療現場

での安全管理体制の構築と安全環境を確保する心構え、さらに感染防止や医療ガスの取扱いなどを、具体例にそって習得する。医療安全管理とは、①有害事象の未然防止、②発生した有害事象への適切な対応、③患者からの苦情相談への対応のための取り組みである。本講義では、これらに関連する重要な問題について基礎知識を習得することを目的として、講義を行う。

公衆衛生学

地域社会において組織化された社会的努力を通じて疾病を予防し、生命を延長し、住民すべての健康を維持し高めるための技術と科学である公衆衛生学の基礎を学習する。具体的には、公衆衛生学の定義、衛生行政、公衆衛生の主要指標である人口動態や生命表などの見方を理解する。喫煙や飲酒などの健康阻害要因、保健対策や環境問題、労働衛生、また、各種の疾病の発生要因とその予防対策について学習する。健康増進や障害予防に関わる上で非常に重要な学問である。

福祉介護概論

複雑高度な生活障がいを持つ高齢者や障がい者（児を含む）の自立生活を支援するために、“ケアニーズ”や“その人らしさ”に焦点をあて、ソーシャルワーカーとして解決すべき課題やエンパワメントを図るために必要な知識や技術、介護理念や職業倫理、介護過程について理解を深める。その際、ソーシャルワークの一領域としてケアワークを位置づけ、ソーシャルワーカーに必要な介護福祉とは何かを考察するとともに、生活障がいを総合的に把握したソーシャルワークを可能とするためのありかたについて探求する。特に、ケアワークとソーシャルワーク、保健・医療・福祉分野の専門職との連携、協働についての理解を深める。

在宅リハビリテーション学

介護保健を主として在宅リハビリテーションにおける社会保障制度・リハビリテーション技術・リスクマネジメント・家族介護者の健康支援等につい

て学習する。活動や参加の視点を重視した生活期のリハビリテーションおよびマネジメントについて理解を深める。長く在宅生活を継続するための障害予防や健康増進の考え方も学ぶ。また、他の専門職との連携、協働についての理解を深める。

言語聴覚療法概論

言語聴覚療法の対象となる様々な障害について、その定義や分類を理解する。また、成人および小児の言語聴覚障害の特性を理解し、評価、治療、指導や対応について学ぶ。広く、コミュニケーションにかかる障害であるため、ヒトとのコミュニケーションの成り立ちについても考える。さらに、特に連携が求められる摂食・嚥下障害についての基礎知識を学ぶ。

健康増進障害予防概論

リハビリテーションの思想である医学的(障害学、理学療法学、作業療法学、保健学等)、社会科学的(心理学、社会学、法学、経済学等)の両側面による健康増進と障害予防に関して、その安全管理・経営管理などを含めて幅広い領域からの知見を理解する。人の健康増進および障害予防を支援するために必要な知識・技術に関して概観的に触れ、介護予防、在宅リハビリテーション、社会参加の支援、さらにヘルスプロモーションの理念を踏襲しながら障害予防の概念に関して理解を深める。

健康増進障害予防演習Ⅰ(検査測定)

「健康増進障害予防概論」および専門領域で学んだ知識を基礎として、人の健康増進と障害予防に関して、その実践に向けた各種身体運動機能検査測定法や精神心理学的検査測定法について演習する。同時に得られた検査測定データの科学的解釈の仕方と、検査測定結果に基づいたヘルスプロモーションのための介入計画立案の概念に関して学ぶ。

健康増進障害予防演習Ⅰ(実践指導)

「健康増進障害予防概論」および「健康増進障害予防演習Ⅰ」で学んだ知識・技術を基礎として、理学療法学、作業療法学、健康増進科学等の各分野に

おける最新の知見を集約して、健康増進と障害予防のための実際のヘルスプロモーションに向けた介入計画の指導や環境調整について学びその統合化を図る。

3. 専門科目(理学療法学専攻)

理学療法概論

1年次に理学療法を概観し、理学療法の定義、歴史、評価-治療体系、対象、主な背景理論、主な治療手段、理学療法教育の変遷などについて学習する。特に、綿密な評価を通じて抽出された問題点に対する理学療法の適応とその実際の方法を理解する。さらに医学的リハビリテーションにおける位置づけ、さらには治療(身体医学)としての理学療法の役割について理解する。

日常生活活動学(理学療法)

本科目では、日常生活活動(動作)の基礎基本事項を学び、人間が豊かな生活を送る上で欠くことのできない一連の生活活動を理解する。具体的には、理学療法の主たる目的である基本動作能力の改善を中心に、摂食活動、排せ活動、入浴・整容活動などの生活動作全般について学習し、視聴覚教材を用いて問題解決のための的確な観察力および分析力を養う。また、各種の疾患による生活動作障がいの特性を理解するとともに、それに対応する訓練法、指導法、福祉用具や各種支援機器の活用について学習して、生活動作能力の向上を通じて対象者の充実した地域生活に貢献する能力を養う

物理療法学

物理療法は熱や光線、電気などの物理的エネルギーを痛みの緩和、循環機能の改善などを目的に作用させる治療方法である。物理的エネルギーが生体へ及ぼす臨床的效果について理解する。物理療法の方法と技術を統合的にまなび、代表的な治療について機器操作ができるようになることを学習目標とする。さらに運動療法学との相互関係を理解し、理学

療法学の体系における物理療法学の科学的な考え方の基礎を身につけることを学習目標とする。

義肢装具学(理学療法)

義肢および装具に関する基礎知識について学習し、切断の理学療法および装具療法について理解し、義肢に関しては断端訓練や義肢装着訓練等、装具に関しては適合判定や装具使用での動作訓練が実施できることを目的とする。具体的には義肢装具の定義、目的、種類、構造、適合判定、断端管理、義肢装具での動作訓練を学び、義肢装具における理学療法の役割を理解する。

理学療法基礎評価学Ⅰ

障害像の把握、治療方針の立案および患者の予後予測を行なう上で検査や評価法を理解することは必須である。本講義では、臨床上、評価頻度の高い関節可動域測定と徒手筋力検査法について学習し、科学的な観察力および思考力を身につけるための基礎とする。具体的には、評価の過程および評価の全体の流れを把握し、四肢・体幹全ての関節の関節可動域および筋力の測定方法について学習し、制限因子や代償動作、日常生活動作との関連について理解を深める。

理学療法基礎評価学Ⅰ 演習

「理学療法基礎評価学Ⅰ」で学習したことを踏まえ、四肢・体幹全ての関節の関節可動域測定および徒手筋力検査法に基づく筋力測定の評価技術を身につけることを目的とする。具体的には、教員によるデモンストレーション、学生同士による演習方式で実施し、「理学療法基礎評価学Ⅰ」で学んだ全ての関節可動域測定および徒手筋力検査法について適切かつ正確な測定が出来るように、実践を通じた学習を行い、臨床の現場で利用できる測定技術の基礎を身につける。

理学療法基礎評価学Ⅱ

心身機能・構造に関する検査法・測定法を実技も交えて学習し、理学療法における問題解決を幅広い

視野にて展開する力を身に付けることを目的とする。具体的には、体力測定、感覚検査、反射検査、片麻痺機能検査、協調性検査、運動発達検査、筋緊張検査、バランス検査、整形外科検査、疼痛検査、脳神経検査、動作分析などについて、各検査の意義・目的を理解し、適切で正確な検査・測定および得られたデータの解釈について学習する。

日常生活活動評価学

本科目では、「日常生活活動学(理学療法)」で学んだことを基に、動作能力の評価バッテリーや動作分析方法について学習し、対象者の有する動作能力および問題点を客観的に測定し、分析する能力を養う。また、評価結果および問題点を統合して具体的な生活像を理解するとともに、対象者の安全で能動的な生活を獲得するための手順や目標設定についても学び、客観的事実に基づいた分析力や判断力を養う。

日常生活活動評価学演習

本科目では、「日常生活活動学(理学療法)」および「日常生活活動評価学」で学んだことを基に、視聴覚教材を利用したり、実際の臨床場面などで障がい有する動作能力の評価や動作分析を行い、実際の日常生活活動の評価方法を体験する。また、ケーススタディによる適切な訓練法や指導法、福祉用具や各種支援機器の活用方法を学習して、対象者の持つ生活上の問題を具体的に解決できる能力を養う。

神経障害理学療法学

脳卒中などの脳血管障害および脊髄損傷の病態生理を理解し、神経障害の理学療法に必要な基礎知識を身につけることを目的とする。さらに各疾患のCTやMRIなどの画像所見と症状のつながり、各疾患が引き起こす合併症や合併症が引き起こすリスク、予後予測に関しても理解を深める。また病態が引き起こす機能障害、能力低下に関し、神経疾患に特異的な理学療法評価方法および理学療法介入について、最新のエビデンスをふまえながら講義を行い、神経障害理学療法の流れを学習する。

神経障害理学療法学演習

「神経障害理学療法学」で学習したことを基に、脳血管障害および脊髄損傷に対する疾患特異的な理学療法評価を実技形式で学習する。また評価学等で学んだ ROM や MMT などの理学療法の基礎評価手技に関しても、神経疾患障害者にどう応用させ実践するのかなどの具体的な講義も行う。さらに臨床での実際と机上での学習の橋渡しとして、ビデオ症例を用いたケーススタディを行い、個々の検査結果を統合解釈する過程をとうして、問題解決能力の向上を目的に演習を行う。

神経障害理学療法学実習

「神経障害理学療法学」および「神経障害理学療法学演習」で学習したことを基に、脳血管障害および脊髄損傷に対する介助方法や運動療法を実技形式で学習する。特に歩行、立位、立ち上がり、座位、寝返り・起き上がりなどの基本動作における運動療法を肢位別だけではなく、肢位間のつながりも意識すること、運動学や生理学、運動学習理論を踏まえた motor learning program を実践できるように理解を深める。また従来の疾患特異的な運動療法のみならず、最新のエビデンストレーニングも実践し学習する。

運動器障害理学療法学

運動器疾患に対する基本的な理学療法評価および治療を行うために必要な治識を身につけることを目的とする。骨折や靭帯損傷などの外傷、リウマチや関節症などの整形外科疾患に関して、「運動器障害基礎論」において学んだ各疾患の病態や医学的な治療法と「理学療法基礎評価学Ⅱ」で学んだ評価方法および評価手技に関する知識を統合して、運動器疾患の理学療法を行うための評価・治療理論を身につける。さらに運動器疾患の術前・術後におけるリスク管理を学習する。

運動器障害理学療法学演習Ⅰ

基本的な運動器疾患の理学療法を行うために必要な知識の再構築と評価・治療手技の演習から、各

疾患に対する理学療法の考え方を身につけることを目的とする。骨折や靭帯損傷などの外傷、リウマチや関節症などの整形外科疾患に関して、「人体構造機能学Ⅰ、Ⅱ」、「運動学」、「運動器障害基礎論」、「理学療法基礎評価学Ⅱ」、「運動器障害理学療法学」において学んだ知識を統合し、各疾患に関わる機能解剖、病態、評価、治療・予防の一連の流れを身につける。

運動器障害理学療法学演習Ⅱ

「運動器障害理学療法学演習Ⅰ」の内容を踏まえ、各疾患の急性期・回復期・慢性期における理学療法が行えるようになるための評価・治療手技の演習から、各疾患に対する理学療法の考え方を身につけることを目的とする。各疾患の急性期・回復期・慢性期における、リスク管理や治療アプローチはそれぞれ異なるため、実際の臨床場面における各疾患の患者を想定し、必要な評価・治療アプローチを選択して患者へ指導し、実施できる技術を身につける。

内部障害理学療法学

呼吸器・循環器疾患に対するリハビリテーションについて学習する。主に呼吸器疾患に関しては、COPD、間質性肺炎、肺炎に対する呼吸リハビリテーションについて、循環器疾患に関しては、虚血性心疾患、心不全、大血管疾患に対するリハビリテーションについて、その理論的背景から評価、治療までを中心に学習する。

内部障害理学療法学演習Ⅰ

「内部障害理学療法学」の内容を踏まえ、急性期、慢性期それぞれにおける呼吸リハビリテーションの評価、問題点の抽出、具体的な治療手技について演習を通じて学習する。またバイタルサインとリスク管理の観点から、フィジカルアセスメント、フィジカルイグザミネーションについて演習を行う。治療手技については、コンディショニング、運動療法のみならず、人工呼吸器や咳嗽機器の体験を通じ、幅広い視点から呼吸リハビリテーションの技術を身につける。

内部障害理学療法演習Ⅱ

「内部障害理学療法」の内容を踏まえ、虚血性心疾患、心不全を中心とした心臓リハビリテーションにおける評価、問題点の抽出、具体的な治療について学習する。とくに全身状態の把握の仕方、リスク管理と運動処方について理解を深め、安全かつ効果的な運動処方を行うことができる能力を身につける。

地域理学療法学

急速に進行する少子高齢化により我が国の社会構造は大きく変化し、保健・医療・福祉・介護領域にも影響を及ぼしている。理学療法を必要とする対象者は増加し、住み慣れた地域で生活できるよう支援するための地域理学療法学の充実が必要であり、本科目では自宅で生活するために、介護保険法や障害者総合支援法などの制度を活用した、医療だけではなく保健、福祉、介護における理学療法療法の支援方法について学び、幅広い視野をもって地域社会に奉仕する理学療法士に興味・関心を広げる。

生活環境学(理学療法)

障害児・者、高齢者が住み慣れた自宅や地域社会において自立した生活を継続することは、対象者のQOL維持・向上の上で重要である。リハビリテーションは、対象者が抱える心身の障害のみならず、住環境、地域や職場（学校）環境をも考慮した幅広い視野を持った支援が必要である。本講義では、住環境整備に関する基礎的な知識、具体的な手法のほか、街の構造等についても理解し、対象者の特徴を考慮した適切な支援について考察を深める。

臨床見学セミナー(理学療法)

本セミナーでは、職業人としての規律やルール、マナー、対象者とのコミュニケーションのとり方について、講義ならびにグループワークを通じて学習する。理学療法士を目指すものとして必要な豊かな人間性や人を思いやる心を理解し、臨床見学実習にふさわしい人間性を育む。

臨床見学実習(理学療法)

臨床見学実習は、臨床実習指導者のもと、実際の臨床の現場を見学する。見学を通じそれまで学習した知識を整理するとともに、臨床現場における理学療法学生としての常識的態度を身につけ、対象者との適切なコミュニケーションを図り、理学療法全体の像を理解する。①職業人としての常識的態度や責任のある行動をとることができる、②対象者や家族、関連職種と望ましい人間関係を持つことができる、③意欲的に取り組む姿勢を持つことができる、④必要な事項を記録・報告できる、⑤施設の概略を理解する、⑥理学療法の過程を理解することが目標となる。豊かな人間性をもった理学療法士の基礎を実践により培う。

臨床評価学セミナー(理学療法)

本セミナーでは、「臨床評価学実習」に向け、学生同士の小グループで、模擬患者役、療法士役、実施内容確認役に分かれ、これまで“理学療法評価学”で学習した臨床上、必要な知識・技術・態度について演習を交えて理解する。知識、技術、態度面も含めて客観的臨床能力試験（OSCE）を実施する。本科目を通じて、評価の計画、実施、その結果の解釈という一連の流れについて理解を深める。

臨床評価学実習(理学療法)

評価学実習では、実習施設において臨床実習指導者のもと、対象者に対する理学療法評価の計画、実施、その結果の解釈という一連の過程を実習する。①必要な情報収集、面接観察および検査測定を選択して実施すること、②評価手段によって得られた結果を個々に分析すること、③その結果を解釈すること、④評価過程を適切に記録し、報告することが目標となる。さらにこの過程を通じて、対象者の障害を把握する科学的な観察力や思考力も養う。

臨床治療学セミナーⅠ(理学療法)

本セミナーでは、「臨床治療学実習Ⅰ」に向け、学生同士の小グループで、模擬患者役、療法士役、実施内容確認役に分かれ、これまで理学療法治療学で

学習した臨床上、必要な知識・技術について、臨床評価実習より進んだ治療プログラム立案までを実践的に演習を行う。主に中枢神経疾患、運動器疾患を中心に、客観的臨床能力試験（OSCE）を実施する。本科目を通じて、評価の計画、実施、その結果の解釈、さらに問題点の抽出、理学療法プログラムの立案という一連の流れについて理解を深める。

臨床治療学実習Ⅰ（理学療法）

臨床治療学実習Ⅰでは、実習施設において臨床実習指導者のもと、対象者に対する理学療法評価から治療プログラムの立案という一連の過程を実習する。リスク管理を的確に行いつつ、①評価結果および分析から統合解釈を行い対象者の全体像を把握する、②評価から治療計画の立案を行う、③基本的な評価手段が確実に実施できる、④一連の過程を適切に記録し、報告すること、これら4点の習得が目標となる。これらにより、対象者の障害について問題解決する理学療法士としての能力を実践により養う。

臨床治療学セミナーⅡ（理学療法）

本セミナーでは、「臨床治療学実習Ⅱ」に向け、学生同士の小グループで、模擬患者役、療法士役、実施内容確認役に分かれ、これまで理学療法治療学で学習した臨床上、必要な知識・技術について、臨床治療学実習Ⅰより更に深い治療の実際までを模擬的ではあるが実践的に演習を行う。主に中枢神経疾患、運動器疾患を中心に、客観的臨床能力試験（OSCE）を実施する。本科目を通じて、評価の計画、実施、その結果の解釈、さらに問題点の抽出、理学療法プログラムの立案という一連の流れについて理解を深める。

臨床治療学実習Ⅱ（理学療法）

臨床治療学実習Ⅱでは、実習施設において臨床実習指導者のもと、対象者に対する理学療法評価から治療実施までの一連の過程を実習する。リスク管理を的確に行いつつ、①評価を行い、②その結果を解釈し、③治療プログラムを立案、④実際に治療内容

の実施、⑤それらに関して一連の過程を適切に記録し、報告すること、これら5点の習得が目標となる。これらにより、対象者の障害を治療する理学療法士としての能力を実践により養う。

ケーススタディー

これまでに学んだ理学療法に関する検査測定、個人因子や環境因子を含めた評価、問題点抽出、目標設定、治療プログラム作成・実施について基礎的な知識を基に、整形外科的疾患、中枢神経疾患の症例を中心としたケーススタディーを行う。ケーススタディーを通し、評価項目の選択・結果の解釈ができるように学んでいく。そして得られた評価結果から、統合と解釈および問題点の抽出の仕方についてもイメージすることができ、臨床実習に繋げられるように進めて行く。

理学療法研究法

保健・医療・福祉、すべての領域において根拠を持ったリーズニングと治療、支援が求められる。その根拠を作り出す作業が研究である。本講義では、研究の意義と目的は何か、また Evidence Based Medicine (EBM) の構築の重要性について学ぶ。その上で、研究デザインと研究の進め方について学習する。一般的な研究手法に加え、医用統計学、診療ガイドライン、作業療法の研究領域と研究実践について網羅的に学習する。また、研究倫理、インフォームド・コンセント、各省庁・団体が定める研究指針について概観する。さらに、研究発表および研究論文作成の手順・方法について学習する。

理学療法研究法演習（卒業研究）

研究を実施した場合、その研究結果を対象者と社会に対して報告することが求められている。本科目では、理学療法研究法で学習した研究の基本に則り、実際の研究の実施を通じて、研究計画書、倫理的配慮、研究の実施、研究報告に関する理解を深める。また、担当教員の指導の下、プレゼンテーションを行い、またディスカッションを行うことで、その理

解をさらに深める。本科目を通じて、思考力、表現力、問題解決能力の総合的なスキルの向上を目指し、生涯にわたり学習し、研究し続ける姿勢を醸成する。

理学療法管理学

本科目では、一般的に身の回りの事項を題材に管理に関する基礎的知識を学習して、更に理学療法部門の業務を適正に管理運営するにあたっての管理についての理解を深め国家試験取得後に現場で活動する医療組織人としての適性を高める事を目的とする。人事管理や労務管理、管理職に求められる能力とリーダーシップ、チームの一員として求められる能力とフォロワーシップ、自己管理と能力開発、学生指導などを学び、障がい者や高齢者など対象者の抱える問題を適切に解決できる、優れた理学療法を提供できる部門管理のあり方について理解を深める。

理学療法ゼミⅠ

本科目では、指導教員の指導のもと、論文抄読を通じて、思考力ならびに科学的な観察力を身に付ける。論文抄読においては、PICOつまりP: patient、I: intervention、C: comparison、O: outcomeを明らかにすることを意識しながら、論文の批判的吟味を行うことができるようになることを目標とする。

理学療法ゼミⅡ

本科目では、「理学療法ゼミⅠ」で学んだ基礎をもとに、論文抄読だけでなく、論文を要約し、プレゼンテーションを行うことで、表現力も身に付ける。また、研究実施の一部参加を通じて、さらに思考力、科学的な観察力を深めることを目的とする。

スポーツ障害理学療法学

スポーツ傷害に対する基本的な理学療法評価および治療を行うために必要な知識を身につけることを目的とする。スポーツ現場で発生頻度の高い捻挫や靭帯損傷などの外傷と、オーバーユースによって生じる関節障害、成長期に特異的なスポーツ傷害

などに関して、機能解剖、病態、受傷機転、診断・評価、治療・予防の一連の流れを学習し、地域のスポーツ競技者・愛好者に貢献できる知識の習得を目標とする。

高齢者理学療法学

急激な高齢化に伴い、今後も高齢者数の増加が見込まれる。高齢者の多くは老化や合併症、認知症・鬱など多くの問題が併存している。そのため、多発する症候や疾患を含め高齢者のライフスタイルを包括的に捉え理解することが求められる。急速に変化する社会的ニーズの要請に対応するべく、高齢者に対する理学療法をどのように進めていくのかを学習する。

神経筋疾患理学療法学

主に神経及び筋肉の変性に起因する疾患について、その病態生理を理解し、病態を考慮した理学療法評価及び基本的理学療法治療もしくはリハビリテーションを理解することを目的とする。特に本科目では筋ジストロフィー症、ギランバレー症候群、ALS、パーキンソン病、脊髄小脳変性症、多発性硬化症などの進行性の神経筋疾患に対し学習し理解を深める。

神経障害理学療法学特論

「神経障害理学療法学」、「神経障害理学療法学演習」、「神経障害理学療法学実習」で学習した脳卒中や脊髄損傷を中心とした中枢神経疾患に関する知識をもとに、中枢神経障害における具体的な場面を想定した課題について、問題解決型学習を中心に実践する。課題の中から解剖学的・症候学的視点から治療アプローチの関連性について理解を深め、臨床的思考能力を養う。また、グループワーク形式を用いて、コミュニケーション能力や問題解決能力の向上を目的とする。

運動器障害理学療法学特論

筋・骨関節系に関わる人体構造機能学や「運動学」などの“基礎医学”、“理学療法評価学”、“運動器障

害理学療法学」、「運動器障害理学療法学演習Ⅰ、Ⅱ」などの理学療法治療学にて得られた知識・技術と、「臨床実習」にて得られた経験を統合し、運動器疾患に対する理学療法が行えるようになるための発展的な学習を目的とする。運動器疾患に関わる理学療法士として臨床現場で働くだけでなく、地域社会に貢献するために必要な専門知識と問題解決能力を養うことを目標とする。

内部障害理学療法学特論

「内部障害理学療法学」、「内部障害理学療法学演習Ⅰ、Ⅱ」で学習した呼吸リハビリテーション、心臓リハビリテーションに関する知識をもとに、内部疾患に対するリハビリテーションにおける問題解決型学習を中心に実践する。具体的には、解剖学的・症候学的視点から治療アプローチの関連性について理解を深めること、グループワーク形式を用いて、コミュニケーション能力や問題解決能力の向上を図る。

生活行為向上リハビリテーション論

私たちの生活は、日常生活における身の周りの動作が滞りなくできるだけでなく、人にとって「意味のある、したい作業」を日々の生活の中で続け、その行為から満足感や充実感を得ることで、健康で充実した生活を送ることができている。しかし、加齢や病気による心身機能の低下により、これまでできていた生活行為が困難になる等、生活をする上で様々な作業の作り直しが求められる。本講義では、生活意欲を高めるもととなる「意味のある、したい生活行為」を再び行えるようにする生活行為向上のための支援あり方、評価ツールの使用方法、支援の提案の仕方を学習する。

国際医療支援論

海外の医療事情を理解し、発展途上国などにおけるリハビリテーション（特に理学療法・作業療法分野）の現状を理解し、国際協力における理学療法士ならびに作業療法士の役割について考察する。本講義を通じて、リハビリテーションに対する幅広い視

野を持ち、国際的に貢献するための素養を深める。有資格者となった後に、こうした国際医療支援の分野に従事することを希望する者に対し、より高い動機づけとなることをねらいとしている。

4. 専門科目（作業療法学専攻）

作業療法概論

作業療法は、その対象、領域、手段が多岐にわたるが、全てに共通していることは、対象者の意味のある作業の獲得によって、人類の福祉に貢献することを目的としている点である。意味のある作業は対象者個人により異なり、対象者の生活史を把握するためには豊かな人間性が必要となってくる。本科目では、作業療法の評価や治療のプロセスや各領域のアウトラインを理解し、社会に奉仕し得る作業療法を学ぶ学生としての使命感の自覚を促す。

作業学概論

作業は広がりと深さをもっている。日常生活の中の作業に関し、どの範囲までを一つのまとまりとするのかは個人や状況により違う。一つにまとまっているように見える作業を詳しく見ていくと、何層にも積み重なっていることが理解できる。作業には人の機能を発達させ、健康を回復させる力がある。人が何かをすること（作業）により、人は成長し、人類は進化し、よりよい社会生活を建設していくことができる。本講義では、「特定の人の生活にある作業」という視点から作業の理解を深めていく。

作業分析学

作業学概論の内容を踏まえ、作業療法で多く用いられる作業活動（革細工、籐細工、陶芸、木工、タイルモザイク）の作業工程を体験し、道具や材料の特性や各作業活動の特性を理解するとともに、身体障害領域、精神障害領域、発達障害領域、老年期障害領域における治療的応用（治療目的、治療適応となる対象者、期待される治療効果と段階付けなど）を可能にするための分析的視点と科学的思考力を

養う。また、作業活動を実施する上での機器や道具、作業環境に関するリスク管理について学ぶ。

日常生活活動学(作業療法)

対象者の日常生活活動(ADL)を評価し、治療等を実践していくための基本的な知識・視点について学習する。評価方法としては、寝がえり、起き上がり等の基本動作や食事や更衣等の日常生活動作(セルフケア)の分析などの定性的な評価方法と、FIMやBI等の定量的な評価方法について学習する。また援助方法としては、福祉用具や自助具などの適応や使用方法についても学習し、対象者の日常生活を支援するための観察力、思考力、問題解決能力を養う。

日常生活活動学(作業療法)演習

「日常生活活動学(作業療法)」の講義内容を踏まえて、対象者の日常生活活動(ADL)を評価し、治療等を支援していくための技術や考え方について演習を通して理解する。具体的には、寝がえり、起き上がり、立ち上がり、移動や移乗も含めた動作の演習や、食事や更衣動作やトイレ動作等の活動分析方法の演習を通して、日常生活場面におけるアプローチ方法を学習する。また、これらの生活動作を観察して客観的事実として記述し、分析するという過程についても学習する。

義肢装具学(作業療法)

義肢装具学は、身体障害作業療法学において対象者の機能障害を補完するために重要な分野である。義肢装具学における知識・技術は、対象者の機能障害を改善・代償することで、活動制限を軽減し、参加を促進することができる。また、義肢装具の製作を行う義肢装具士との連携が強く求められる分野でもある。そこで本科目では、特に作業療法との関連の深い上肢装具を中心に講義を行い、義肢装具士や福祉との連携に対応できる知識を習得する。

義肢装具学(作業療法)演習

義肢装具のうち、更生用は身体機能を補完・代替

し、日常生活や就労・就学のために長期間にわたり継続して使用されるものであり、義肢装具士が製作する。一方、治療用装具・訓練用仮義肢は治療を目的として使用されるものであり、作業療法士が製作する。本科目では、特に作業療法と関連の深い義手を中心に学習し、治療用装具として製作する機会の多いスプリントについて製作演習を行い、対象者の機能障害の改善や代償に対する基本的な技術を習得する。また、対象者が使用していることが考えられる義足や体幹・下肢装具についても触れる。

社会生活行為学

作業療法の介入にあたっては、身の回りの日常生活動作に加えて、対象者の役割に関わる日常生活関連活動への支援が重要である。そこで本科目では、国際機能分類における活動・参加に焦点を当て、地域社会で生活するために必要な諸活動の評価、治療、支援方法について学習する。具体的には、主に障害者や高齢者の家事活動、自動車運転、職業関連活動、障害児・者の就学活動等であり、それらを支援するために必要な知識、制度および他職種連携について学習する。

作業療法評価学(身体・老年期障害)

作業療法の介入における評価過程は、介入の第一歩であり、治療・指導・援助の介入方法を思考するために欠くことのできないものである。そこで、本講義では身体および老年期障害領域における評価の概要や流れについて理解を深め、その際に用いる種々の検査方法(関節可動域、筋力検査、反射検査、協調性検査等の概要)、観察・面接方法について学習する。また対象者の全体像を把握するために必要なICF分類や専門的知識の習得を目指す。

作業療法評価学演習Ⅰ(身体・老年期障害)

作業療法の介入における評価過程は、介入の第一歩であり、治療・指導・援助の介入方法を思考するために欠くことのできないものである。そこで本科目では、作業療法評価学で学習した内容をふまえて、人間の身体運動の基本となる関節運動、筋力を

評価する手段である関節可動域測定、筋力検査（上肢、下肢、手指）の演習を行い、測定方法を理解する。またその際の特徴的な動作（代償方法）についても観察、考察できるようになることが目標である。また、観察したことから障害の原因を分析し、問題解決能力を養う。

作業療法評価学演習Ⅱ(身体・老年期・発達障害)

作業療法の介入における評価過程は、介入の第一歩であり、治療・指導・援助の介入方法を思考するために欠くことのできないものである。そこで、本科目では、作業療法評価学で学習した内容をふまえて、中枢神経疾患および末梢神経疾患および発達障害に対する専門的な検査方法について演習を行い、測定方法を理解する。またその際の特徴的な動作（代償方法、障害に特有の動作等）についても観察、考察できるようになることが目標である。また、観察したことから障害の原因を分析し、問題解決能力を養う。

作業療法評価学(精神障害)

作業療法のかかわりにおいて原則的なことであるが、特に、対人関係の障害ともいわれる精神障害がある人に対しては、一通りの評価を終えてから治療を開始するという方法がとりにくい。治療・援助関係の成立如何が、後の治療・援助の進展や効果に大きく影響するため、初回の面接時から、場合によっては、まだ対象者と出会っていない作業療法処方が出されたときから、治療・援助のかかわりは始まっているといえる。本講義では、そのような特性がある、精神障害がある人に対する作業療法評価について学習する。

作業療法評価学演習Ⅲ(精神障害)

「作業療法評価学(精神障害)」を踏まえて、各疾患の事例をもとに精神障害における評価過程を学習する。精神科領域の評価においてはかかわり行為と切り離せないため、対象者との関係のとりにかた、対象者に不利益とならない治療的配慮、そして必要

な情報の収集など、混在したかかわり行為についても検討し、その上で情報の収集としての対象者観察、面接技術、作業遂行のチェックや各種精神機能、心理状態、生活状況、興味関心を測る評価スケールの概要や使用方法について演習を通して体験し習得する。

作業療法評価学(発達障害)

発達期に生じた障害を有する小児にとって課題となる ADL、遊び、学業(就労)について作業療法が支援をする上では、これらの基盤となる運動機能、感覚-知覚-認知機能、心理・社会機能といった作業遂行要素への介入が必要となる。作業遂行要素は相互に密接に関係しながら発達しており、対象児にとって必要な支援の方法を探るため、これらの発達過程について理解を深め、幅広い視野をもって、対象児の障害構造を評価する視点を養う。

作業療法評価学(高次脳機能障害)

認知機能が破綻した、あるいは破綻する可能性のある対象者の日常生活を支援することが作業療法士の役割である。本講義では、これまで学習した認知機能の概要、神経機能解剖学を基礎として、既存の神経心理学的検査や評価手法の理論的構造、行動観察の視点について学習を行う。その過程で、種々の認知機能の構造と病態に関する理解を深める。加えて、加齢に伴う認知機能の変化や疾病による認知機能の低下が人の生活に与える具体的影響について学習を行う。

作業療法評価学演習Ⅳ(高次脳機能障害)

認知機能が破綻した、あるいは破綻する可能性のある対象者の日常生活を支援することが作業療法士の役割である。本講義では、これまで学習した内容を踏まえ、既存の神経心理学的検査や評価手法を、健常者を対象として経験する。その過程で、種々の認知機能の構造に関する理解を深める。加えて、加齢に伴う認知機能の変化や疾病による認知機能の低下が人の生活に与える具体的影響について、それらの検査や評価結果からどのように臨床的推論を

すすめていくのかを教授する。

身体障害作業治療学

本講義では、骨関節、中枢神経、末梢神経、筋疾患などの身体障害に対する作業療法の基本的な介入について解説し、各疾患別による障害の症状や病態像、評価、作業療法介入・治療・訓練について学習する。また、社会サービスの適応についても学び、近年の作業療法のトピックである身体障害者への生活の援助方法を学習する。さらに、呼吸器疾患とターミナルケアについても解説し、様々な身体障害分野に対応出来る知識と技術を身につけることを目標とする。

精神障害作業治療学

生物・心理・社会的側面を持つ精神障害への治療・介入は単一の特殊技能にとどまらず、複合的なアプローチによる協力的、相互作用のかつ多面的な作業療法的支援が重要となる。本講義では、各種疾患・障害像から生活障害の起こりやすい状況の理解と特性に合った対応を学習することを基本とし、心理社会的側面の治療的アプローチを題材に、主体的生活者としての対象者について、多面的な理解、より良い予防的かつ効果的なリハビリテーションアプローチ、作業療法アプローチ、治療の構成・構造について理解を深める。

発達障害作業治療学

発達期に生じた障害を有する小児では、疾患により特徴的な問題を抱えやすく、また、現在のみならず将来に亘りライフステージによって対処すべき課題があり、療育の視点に基づいた作業療法支援が必要となる。本講義では、作業遂行要素の評価を基に、とくに脳性運動障害児、発達障害児、進行性疾患（筋ジストロフィー）の障害構造、発達過程での対処すべき課題に対する理解を深める。また、代表的な治療理論について理解し、対象児への具体的な作業療法介入について幅広い視野から考察を深める。

老年期障害作業治療学

超高齢社会の現代は、高齢者の生活障害を予防・改善し、生活の質を高める作業療法介入が重要視されている。老年期の作業療法では、全身状態の調整、日常生活活動の遂行支援、余暇活動の遂行支援、環境の調整、心理的サポートなどが直接的介入として行われている。そこで本科目では、老年学で学習した加齢に伴う心身の変化を踏まえた上で、加齢や老年期の病理に起因する生活障害を理解し、主として維持期（生活期）に関わる対象者への直接的介入方法について講義を行い、制度を踏まえた実践や他職種との連携に対応できる知識を習得する。

高次脳機能障害作業治療学

何らかの原因で認知機能が破綻したことによる生活障害を有する対象者を支援することが作業療法士の役割である。加えて、加齢や疾病に伴う認知機能の変化・低下を予防し、対象者のよりよい生活を維持するために支援することも作業療法士の役割である。本講義では、これまで学習した内容を改めて概観しながら、あらゆる認知機能の変化・低下に対する支援方法を理論的に学習する。また、現在、地域・医療機関・福祉施設の臨床で実践されている支援方法についても学習する。

生活環境学(作業療法)

障害児・者、高齢者が住み慣れた自宅や地域社会において自立した生活を継続することは、対象者のQOL 維持・向上の上で重要である。リハビリテーションは、対象者が抱える心身の障害のみならず、住環境、地域や職場（学校）環境をも考慮した幅広い視野を持った支援が必要である。本講義では、住環境整備に関する基礎的な知識、具体的な手法のほか、街の構造等についても理解し、対象者の特徴を考慮した適切な支援について考察を深める。

地域作業療法学

超高齢社会の進行に伴って、リハビリテーションサービスを必要とする対象者が増加している。対象者が住みなれた地域で生活できるように支援する

ためには、地域でのリハビリテーションサービスの充実が必要である。そこで本科目では、自宅で生活するために、介護保険法や障害者総合支援法などの制度を活用した、医療だけではなく保健、福祉における作業療法の支援方法について学び、幅広い視野をもって社会に奉仕する作業療法士に興味・関心を広げる。

臨床見学セミナー(作業療法)

本セミナーでは、「臨床見学実習」に向けて、職業人としての常識的行動や責任ある行動、対象者や病院施設のスタッフとの望ましい関係、医療におけるチームワーク、協業について、講義とグループワークによって理解する。実習記録、レポートなどの課題の提出方法、知り得た情報やそのデータの管理方法についても理解する。また作業療法士を目指す人として必要な豊かな人間性や人を思いやる心についての基礎を理解し、臨床見学実習にふさわしい人間性を育む。

臨床見学実習(作業療法)

臨床見学実習は、臨床実習指導者のもと、単なる見学にとどまらず、臨床現場における作業療法学生としての常識的態度を身につけ、対象者との適切なコミュニケーションを図り、病院・施設の概要、作業療法の過程について体験を通して理解する実習である。①職業人としての常識的態度や責任のある行動をとることができる、②対象者や家族、関連職種と望ましい人間関係を持つことができる、③意欲的に取り組む姿勢を持つことができる、④必要な事項を記録・報告できる、⑤施設の概略を理解する、⑥作業療法の過程を理解することが目標となる。これらにより、使命感を自覚し、豊かな人間性をもった作業療法士の基礎を実践を通して培う。

臨床評価学セミナー(作業療法)

本セミナーでは、「臨床評価学実習」に向けて学生同士の小グループ(模擬患者役、療法士役、実施内容確認役)に分かれ、講義内容に記された項目を通して临床上必要な知識・技術・態度について学

習し、各自に対し試験(客観的臨床能力試験:OSCE)を実施する。また、臨床見学実習と同様に、職業人としての常識的行動や責任ある行動、対象者や病院施設のスタッフとの望ましい関係、医療におけるチームワーク、協業について再度理解を深めた上で、実習に臨むこととする。

臨床評価学実習(作業療法)

臨床評価学実習では、実習施設において臨床実習指導者のもと、対象者に対する作業療法評価の一連の過程を実習する。対象者と適切に対応し、リスク管理を的確に行いつつ、①必要な情報収集、面接観察および検査測定を選択して実施すること、②評価手段によって得られた結果を個々に分析すること、③分析結果をもとに統合解釈を経験して評価の意義を理解すること、④評価過程を適切に記録し、報告することが目標となる。これらにより、対象者の障害を把握する科学的な観察力を実践を通して養う。

臨床治療学セミナーⅠ(作業療法)

本セミナーでは、「臨床治療学実習Ⅰ」に向けて学生同士の小グループ(模擬患者役、療法士役、実施内容確認役)に分かれ、講義内容に記された項目を通して临床上必要な知識・技術・態度について学習し、各自に対し試験(客観的臨床能力試験:OSCE)を実施する。また、これまでの臨床実習と同様に、職業人としての常識的行動や責任ある行動、対象者や病院施設のスタッフとの望ましい関係、医療におけるチームワーク、協業について再度理解を深めた上で、実習に臨むこととする。

臨床治療学実習Ⅰ(作業療法)

臨床治療学実習Ⅰでは、実習施設において臨床実習指導者のもと、対象者に対する作業療法評価および治療計画立案までの一連の過程を実習する。対象者と適切に対応し、リスク管理を的確に行いつつ、①評価結果および分析から統合解釈を行い対象者の全体像を把握すること、②評価から治療計画の立案を行うこと、③基本的な評価手段が確実に実施で

きること、④一連の過程を適切に記録し、報告することが目標となる。これらにより、対象者の障害を問題解決する能力を実践を通して養う。

臨床治療学セミナーⅡ(作業療法)

本セミナーでは、「臨床治療学実習Ⅱ」に向けて学生同士の小グループ(模擬患者役、療法士役、実施内容確認役)に分かれ、講義内容に記された項目を通して臨床上必要な知識・技術・態度について学習し、各自に対し試験(客観的臨床能力試験:OSCE)を実施する。また、これまでの臨床実習と同様に、職業人としての常識的行動や責任ある行動、対象者や病院施設のスタッフとの望ましい関係、医療におけるチームワーク、協業について再度理解を深めた上で、実習に臨むこととする。

臨床治療学実習Ⅱ(作業療法)

臨床治療学実習Ⅱでは、実習施設において臨床実習指導者のもと、対象者に対する作業療法評価および治療実施までの一連の過程を実習する。対象者と適切に対応し、リスク管理を的確に行いつつ、①評価から治療の遂行までを行うこと、②基本的な作業療法評価・治療が実施できること、③一連の過程を適切に記録し、報告することが目標となる。これらにより、対象者の障害を問題解決する能力を実践を通して養う。

作業療法研究法

保健・医療・福祉、すべての領域において根拠を持ったリーディングと治療、支援が求められる。その根拠を作り出す作業が研究である。本講義では、一般的な研究手法に加え、医用統計学、診療ガイドライン、作業療法の研究領域と研究実践について網羅的に学習する。また、研究倫理、インフォームド・コンセント、各省庁・団体が定める研究指針について概観する。さらに、研究発表および研究論文作成の手順・方法について学習する。

作業療法研究法演習(卒業研究)

研究を実施した場合、その研究結果を対象者と社

会に対して報告することが求められている。本講義では、作業療法研究法で学習した内容に基づいて、研究計画書作成、倫理同意書作成、研究実施、研究報告の過程を体験する。また、上記の過程については担当教員の指導の下、担当教員と小グループ(ゼミ)内で研究の進捗状況を確認しながら進める。また小グループ内での批判的ディスカッションを行うことで研究の意義や目的を確認するプロセスや研究の楽しさを学習する。

作業療法管理学

講義を通して、リハビリテーション部門および作業療法部門の組織体系について理解し、医療・福祉・介護領域(病院・施設等)での役割について理解する。また、組織における作業療法部門の位置づけと、実際の管理、運営方法について学習する。また、作業療法に関わる診療報酬や施設認可の規定、記録等の個人情報の取り扱い、医療事故・ヒアリハットに対する危機管理等の実際や、守秘義務等のチーム医療で必須となる職業倫理について理解を深める。

作業療法特別セミナー

作業療法士として臨床業務を遂行するにあたっては、生涯学習は欠かせないものであり、新しい知見や診療報酬等の制度改定に対応していくことが求められる。そこで、本科目では、多岐に渡る作業療法領域の中から、社会的なニーズとして作業療法士に求められている、もしくは求められる可能性のあるトピックに着目し、グループワーク等を通して、応用的な評価-治療方略や支援方法を学習する。本講義を通して、生涯学習の基盤となるような探求心、問題解決能力、思考力を養う。

特別支援教育概論

2007年度より施行された特別支援教育制度では、対象を知的に遅れのない発達障害の児にも広げ、乳幼児期から就労に至る過程に亘って、個々の特徴を踏まえた上での支援を目指している。支援の過程では教育以外の医療、福祉分野との連携が求められており、以前に増して作業療法士による支援が求め

られる機会が増えている。本講義では、現場での支援に携わっている作業療法士の実践から、教育、福祉分野との連携について学び、地域に貢献できる作業療法士のあり方について考察を深める。

箱づくり法

箱づくり法は、箱を作り、振り返る一連の作業を通して対象者の作業能力・対人技能などを評価する作業面接である。作業体験を共有することにより、客観的指標と主観的体験内容に基づき、具体的な援助を対象者と確認することができる。また、数値化、視覚化されたデータは対象者や治療チームに具体的なエビデンスを提供する。本講義では、臨床で使えるようになることを重視し、箱づくり法のやり方やデータの読み方を中心に、臨床場面で見落とし、見誤り、思い込み陥りがちな治療者自身の”評価の目”を養うことを目的とする。

身体・老年期障害作業治療学特論

本講義では身体・老年期障害領域の作業療法で対象となる疾患の特徴や、作業療法支援の実例を通して、具体的な治療展開、支援方法について理解を深める。また、文献検索、文献抄読、グループワーク、プレゼンテーションを通して、症例を深く掘り下げて考察することを学ぶ。また、臨床現場における事例のまとめ方や発表の方法についても学習する。この事例研究の過程を通して、身体・老年期障害領域における知識や実践方法についての探求心を深めていく。

精神障害作業治療学特論

事例報告、事例研究の文献をもととして、疾病性と事例性の混在する精神障害領域の対象者について、そのかかえている多層的な生活機能の諸点と作業療法支援の実例から理解ならびに探求を深める。個々の症例を取り巻く状況は複合的な要因の相互作用によるため、一面的に終わらずに各々の生活機能の分析と関係性を踏まえることが必要である。対象者の意思、要望を踏まえた上で適切に作業療法支援を進めていくための段取りや考え方を身につ

けられるように進めていく。

発達障害作業治療学特論

文献抄読を通じて、発達障害領域で作業療法の対象となる疾患の特徴や、作業療法支援の実例から、対象児の有する様々な要素によって優先されるべき課題など、具体的な介入の視点、ポイントについて理解を深める。また、障害を有する児に対して治療手段として用いられる玩具・遊具などの持つ要素について理解し、その作製や活用法について考察を深める。既習の知識に基づいたこれらの課題を通して、発達障害領域における作業療法の実践についての探求心を深める。

生活行為向上リハビリテーション論

私たちの生活は、日常生活における身の周りの動作が滞りなくできるだけでなく、人にとって「意味のある、したい作業」を日々の生活の中で続け、その行為から満足感や充実感を得ることで、健康で充実した生活を送ることができている。しかし、加齢や病気による心身機能の低下により、これまでできていた生活行為が困難になる等、生活をする上で様々な作業の作り直しが求められる。本講義では、生活意欲を高めるもととなる「意味のある、したい生活行為」を再び行えるようにする生活行為向上のための支援あり方、評価ツールの使用方法、支援の提案の仕方を学習する。

国際医療支援論

海外の医療事情を理解し、発展途上国などにおけるリハビリテーション（特に理学療法・作業療法分野）の現状を理解し、国際協力における理学療法士ならびに作業療法士の役割について考察する。本講義を通じて、リハビリテーションに対する幅広い視野を持ち、国際的に貢献するための素養を深める。有資格者となった後に、こうした国際医療支援の分野に従事することを希望する者に対し、より高い動機づけとなることをねらいとしている。

 北海道千歳リハビリテーション大学